第５章　東山総合公園のあゆみ

東山動植物園のあらまし

明治23年、今泉七五郎が自ら収集した動・植物１千余種を前津町で公開し、その後、明治43年10月に大須門前町に移転した「浪越教育動物園」が名古屋市の動物園の始まりであった。同園は本市の助成を受けつつ運営されていた。大正６年２月、本市が同氏からこれらの動植物の寄附を受けたのを機に鶴舞公園に移転し、大正７年４月１日、名古屋市立鶴舞公園付属動物園として創設し、４月20日に開園した。その後、入園者が増加し鶴舞では手狭になっていった。大正15年１月28日、当時の愛知郡天白村大字八事裏山、山田及び東区田代町唐山、瓶杁、新池の丘陵の一部、面積2,673,000m^{2}が第16号公園として都市計画決定された。かねてから動物園の候補地を検討していたが、昭和７年６月、この都市計画区域のうち田代町唐山一帯の景勝地に、動物園、植物園を包含した一大公園を建設する計画が完成した。

以後、関係地主から用地の一部として587,146m^{2}の土地の寄附を受け、その他の編入地を加えて合計806,834m^{2}を敷地として、昭和９年着工、昭和10年４月３日に東山公園が開園した。計画に従い、昭和12年３月３日に植物園が、続いて同年３月24日に動物園が東山公園内に開園した。

○動物園

動物園は、ドイツのハーゲンベック動物園にならい、近代動物園として当時最も斬新な「無柵式放養形式」(動物を檻に入れず、堀により動物と観客を隔て、安全にしかも視野のさえぎるもののない自然に近い状態で見ることができるもの)を取り入れ、名実ともに東洋一を誇っていた。当時の人々にとって、檻なしでライオンやホッキョクグマを見られることは驚きであった。

動物園では、園の目玉として開園の年の12月、サーカスから４頭のインドゾウを購入、これが一躍人気者になった。特にエルド、マカニーの２頭は戦争が激化し国内の動物園の猛獣が次々と殺されていく中、関係者の努力により戦後再開された動物園で唯一残ったゾウとなった。昭和20年、戦争によって一時閉鎖されたが復旧に努め、荒廃した戦災都市の数少ないレクリエーション施設の１つとして、昭和21年３月17日再開園された。辛うじて生き残ったゾウ２頭については、全国各地の子どもたちが見られるよう昭和24年に特別列車「ゾウ列車」が運行されるなど、復興時代のスターとなり、その人気は昭和48年のパンダブームをしのぐものがあったと言われている。昭和26年３月には移動動物園を編成し、東海３県を巡った。移動動物園は約３か月間続いたが、この移動動物園の経験が、昭和26年10月から始まった「ニコニコサーカス」という形に発展し、東山の名物となり20年もの間続いた。これは市民とともに歩む戦後の東山動物園の姿勢を明確にした記念すべき第一歩となった。開園20周年の昭和32年には北園も整備され、収容動物は約260種1,000点、この当時の入園者は年間100万人～150万人となり、戦前をしのぐまでになった。そして、昭和32年３月15日から５月31日まで開園20周年を記念して「子供の楽園世界探検博」が催され、大変なにぎわいを見せた。

昭和38年４月１日には地下鉄が池下から東山公園まで2.5km延長、名古屋駅からの所要時間が短縮された。この結果、この年度の動物園の入園者は、前年の1,850,325人に比べ33％増の2,462,330人と驚異的な伸びを示した。この地下鉄開通に合わせて東山動物園では「マジックフェア」を開催、水族館もオープ

ンし、華やいだ雰囲気をより一層盛り上げた。「ゴン太」「オキ」「プッピー」によるゴリラショーもこの年から行われ、出し物も最高20種にも及んだ。

その後、ゴリラショーは日本中を沸かし、昭和41年秋には約600人を収容できる観覧席も設けられた。だが、ゴリラたちが成長するにつれて野生動物の特徴が現れ、昭和43年６月３日、ゴリラショーは中止された。

また、開園30周年を迎えた昭和42年は動物園・植物園一帯で「キンダーフェア」が催され、この年、植物園の壁泉・夢のカスケードや、北園こども遊園地にジェットコースターが完成した。

昭和52年には開園40周年を迎え記念として「オーストラリアフェア」を開催した。

○植物園

植物園は、昭和７年、東邦瓦斯株式会社（現東邦ガス）より植物園新設の基金として25万円の指定寄附を受けたのを元に、昭和９年秋に起工し、動物園より一足早く昭和12年３月３日に開園した。面積約24.4haの敷地には、当時東洋一とうたわれた大温室を中心に、丘陵地帯の起伏を生かした山地に樹木を配し、自然と調和させた大庭園としてオープンした。以後、終戦までに毎年５万人から８万人の入園者数があった。昭和20年３月には空襲により温室が被害を受け、同年５月には日本軍に接収された。終戦を迎えた昭和20年10月、今度は米軍の手によって温室前庭が墓地として接収を受けたが、昭和21年には解除、同年３月から復旧再開園となった。その後、昭和23年には、郷土の代表的な俳人横井也有翁を顕彰する也有園を造設、昭和25年にはアメリカのミズリー植物園からパラグアイオニバスの種が贈られ、同年８月には戦後日本では初のパラグアイオニバスが開花し、明るい話題を投げかけた。これとともに入園者も飛躍的に増加し、昭和26年には年間入園者数が20万人を超えるまでになった。昭和31年には白川村から合掌造りの家を移築、昭和34年には伊勢湾台風による被害を受けたものの、施設整備は急ピッチで進んだ。昭和35年にはハワイアンハウス、梅林及び椿園が完成し、昭和39年には竹見本園、昭和42年にバラ園、武家屋敷門の移築、昭和45年に洋風庭園、昭和50年に熱帯花木温室サンギャラリー、昭和51年に水生植物温室、園芸実習所、昭和55年に植物会館がオープンし、伊藤圭介記念室が常設展示されるなど、植物園としての規模、内容とともに充実したものとなっていった。

開園当初の正門の様子

平和公園のあらまし

第２次世界大戦による名古屋市の被害は甚大で、当時の市域の約23％が焼失したが、本市は旧市街地中心部の大改造の機会として、昭和21年から焼失区域を中心に約4,400haの区域について復興都市計画土地区画整理事業を進めてきた。この区域には279か所の墓地約18ha、約189,000基の墓碑があったが、これを当時の千種区田代町鹿子殿地内約147haの閑寂静浄な土地に移転することにし、この地区を平和公園と名づけ、全国的にも珍しい墓地公園（都市計画墓園第一号東墓園）として計画した。墓碑移転については、関係仏教各派からの代表で構成された名古屋市戦災復興墓地整理委員会を結成し、各寺の合意を得て事業を実施、ほぼ墓碑移転の完了した昭和38年に発展的に解散し、業務を新たに発足した名古屋市平和公園会に引き継いだ。

平和公園は、都市計画道路猫ヶ洞藤森線を境として北部地区と南部地区とに大別することができる。北部地区約92haには、墓地とこれを取り巻くように緑地を配し、大部分が国有地である南部地区約52haは、自然を生かした市民や墓参者の憩いの場として、整備が実施された。

第１節　東山動植物園

１　動物園

1980年代（昭和58年～平成元年）

○タロンガ動物園から雄コアラ２頭来園

昭和55年の名古屋市とシドニー市の姉妹都市提携を機に、東山動植物園とタロンガ動物園の交流が盛んになった。この姉妹都市提携から４年後の昭和59年10月25日、タロンガ動物園から２頭の雄コアラを東山動植物園に迎え入れた。万全の体制で受け入れるために、事前準備としてコアラ飼育及びユーカリ栽培の研修に職員をオーストラリアへ派遣しただけでなく、ブラザー工業株式会社の寄附による冷暖房完備のコアラ舎を新たに整備するとともに、来園の３年前から平和公園でユーカリの栽培に取り組んだ。

この２頭は日本に初めて導入されたコアラであり、タロンガ動物園では「グリーン」、「シルバー」と呼ばれ、それぞれが緑色と銀色の耳標をつけていた。昭和59年11月10日に、オーストラリア大使館でコアラの愛称公募が行われ、グリーンは「モクモク」、シルバーは「コロコロ」と命名された。愛称公募から10日後の昭和59年11月20日にコアラの一般公開を行うコアラ公開式典が執り行われ、日本初公開のコアラを見ようと多くの方々が東山動植物園に来園し、コアラ舎から動物園入り口まで続く長蛇の列となった。

タロンガ動物園から来園したコアラ

その後も２頭の人気は衰えず、モクモクとコロコロはシドニー市との友好を結ぶ動物大使として長きにわたり活躍した。

○自然動物館開館

平成元年の10月28日に、自然動物館が開館した。市制100周年記念事業の一環として建設された自然動物館は、延床面積が3,827.76 m^2あり、１階の夜行性動物エリア、２階の爬虫類・両生類エリア、１階と２階をつなぐプロムナード、屋外のオオサンショウウオ水槽からなっている。当時、国内に類のない生態展示を行うことのできる施設で、展示室ごとに異なる自然環境を再現できるため、砂漠や熱帯雨林等、極端な気候の地域で暮らす動物であっても飼育が可能になった。展示室数は１階には31部屋、２階には42部屋あり、加えて屋外のオオサンショウウオ池や２階の展示水槽60個、プロムナードでの展示も行っていた。このため、一つの施設に収容できる動物数において日本有数の施設でもある。

開館時の自然動物館

また、自然動物館の開館に伴い、昇降機や園路も併せて建設し、北園門に連なる南北アメリカエリアと夢園橋周辺が連絡されたことで回遊性が向上した。

1990年代（平成２年～平成11年）

○世界のメダカ館オープン

昭和38年に建設された旧水族館が老朽化したことにより、新たな水族館の構想が検討された。その中で、名古屋港水族館とは異なるアプローチを目指すことが求められ、メダカや日本産淡水魚を中心とした、日本人にとってなじみがあるにもかかわらず生息数が大きく減少してしまった魚を中心に展示する小さな水族館を整備することが決定した。そして、平成５年10月７日に世界のメダカ館としてオープンした。

世界のメダカ館オープン式典

世界のメダカ館では、ポプタメダカやオオフォラスメダカの繁殖に国内で初めて成功し、令和３年度に日本動物園水族館協会（JAZA）の初繁殖認定を受けた。

また、インドネシアのスラウェシ島での現地調査にも参加し、採取された新種とみられるメダカの飼育にも取り組んだ。その結果、琉球大学熱帯生物圏研究センターとの共同研究により、ティウメダカ（平成26年）、ドピンドピンメダカ（平成30年）、ランダンギメダカ（令和４年）の３種が新種として報告された。このように世界のメダカ館は種の保全だけでなく、職員が主体となった学術研究にも取り組んでおり、令和３年にはJAZAから「新種のメダカ科魚類発見とその累代飼育」が評価され、希少動物の繁殖に特に功績のあった動物園や水族館に対して贈られる古賀賞を授与されている。

○タロンガ動物園との姉妹動物園提携

東山動植物園は、昭和55年の名古屋市とシドニー市の姉妹都市提携を機に交流を深めたタロンガ動物から昭和59年にコアラを迎え入れた後も、コアラの譲渡をたびたび受け、繁殖にも幾度も成功し、平成５年にはそのうちの１頭がタロンガ動物園へ里帰りを果たした。

また、平成６年には飼育技術の向上を主な目的として両動物園間での職員交流も開始され、以降も定期的に職員を１カ月ほどにわたって派遣し合ってきた。

そして、平成８年には、野生動物の繁殖計画と保全の推進等を目的とした姉妹動物園提携をするに至った。これ以後、希少動物の繁殖のための動物交流が促進され、東山動植物園はインドサイやフランソワルトン等を送り出し、タロンガ動物園からニシゴリラやコアラ等を迎え入れた。特にコアラについては、累計で17頭（令和４年度末時点）がタロンガ動物園から贈られており、東山動植物園で繁殖した子孫たちは、日本各地の動物園へ移動して、国内飼育下個体群の維持に貢献している。

タロンガ動物園との覚書

○中国からキンシコウ３頭来園

平成３年11月、平岩助役が名古屋市と友好都市提携を結んでいる南京市を訪問した際に、キンシコウの導入を要請した。その後の平成９年に、西尾市長が南京市長への退任あいさつの書簡内で再度キンシコウを要請したところ、南京市長より中国政府との間で折衝を開始しているとの返書があったため、本市でも導入を前向きに進めることになった。中国政府内の機構改革により人員削減や人事異動があり、動物輸出に関わる事務が遅れるというトラブルもあったが、平成12年１月13日に中国野生動物保護協会と名古屋市農政緑地局との間で「金絲猴共同研究協議書」が締結され、同年４月28日に３頭のキンシコウが到着した。

キンシコウを迎えた後も、毎年中国の動物飼育の専門家を招いて飼育や研究に係る技術指導を受け、10年間の飼育期間の中でキンシコウの繁殖に成功したほか、飼育下でのキンシコウの繁殖生理やキンシコウ新生仔における行動発達に関する研究等を行い学会で発表するなど、種の保全活動に大きく貢献した。

2000年代（平成12年～平成21年）

○タロンガ動物園からニシゴリラ（シャバーニ）来園

平成19年６月27日、姉妹動物園であるオーストラリアのタロンガ動物園から、ニシゴリラのシャバーニ（オス）が来園した。来園後、しばらくは動物病院の霊長類検疫施設で飼育し、輸入検疫と並行して移動のためのトレーニングを行った。シャバーニの来園に先立って東山動植物園の職員がタロンガ動物園を訪問し、飼育技術の指導を受けた。

また、シャバーニの来園時にもタロンガ動物園の職員が同行し、シャバーニのトレーニングや飼育について様々なアドバイスを受けた。

検疫が終了した後、８月16日にゴリラ舎へ移動し、他のゴリラと合わせて４頭での群れ飼育を目指した。しかし、当時最高齢のオキ（メス）との同居が困難であったため、シャバーニとネネ（メス）、オキとアイ（メス）の２頭ずつのグループに分けて飼育することになった。オキの死後に、ネネ、アイとの３頭同居に成功し、ネネとアイがそれぞれシャバーニの仔を出産している。ネネの仔であるキヨマサ（オス）とアイの仔のアニー（メス）は現在も東山動植物園で暮らしている。

また、シャバーニは、平成27年３月頃から、その精悍な風貌がSNS上で話題となり、東山動植物園春まつりのポスターに起用していたこともあって、ゴリラ舎に訪れる来園者が徐々に増え、「イケメン」とつぶやかれるようになった。その後、平成27年５月にニュースサイトのトップニュース８に「愛知のゴリラ、イケメンと話題」との記事が選出され、国内メディアの取材が増えるようになり、６月末頃からは、海外メディアからの問い合わせも増えるようになった。さらに、平成28年度の名古屋市職員募集のポスターにも使われたほか、旅行会社のテレビCM、ポスターや年賀状にも使用され、平成28年４月にはシャバーニ関連グッズは100種類を超えた。

このような人気が続き、今後もその名称を使用されることが増えると予想されたことから、第三者による名称の使用に対抗するため、平成28年３月に「シャバーニ」と「SHABANI」の二つの商標登録を出願し、平成28年９月に商標が登録された。

その後、平成30年の９月には「新ゴリラ・チンパンジー舎」が完成し、その年の東山動植物園秋まつりで実施された「人気動物ベス

ト10」では46年ぶりにゴリラがトップとなり、現在も人気は続いている。

ニシゴリラのシャバーニ

○スリランカからアジアゾウ２頭来園

平成16年頃、ゾウの導入に向けて調査を行ったところ、スリランカの動物園から譲渡を受けられる可能性があるとの情報が得られ、導入に向けて準備が進められた。

交渉の過程でスリランカのデヒワラ動物園からはクロサイとゾウの交換が提示されたため、国内の動物園からクロサイの雌雄ペアを購入し、動物交換を行うことになった。

そして、平成19年７月28日にスリランカから当時３歳のオス「コサラ」と５歳のメス「アヌラ」が来園した。コサラは担当飼育員の指示に対して反応が良く、新しいこともすぐに覚えた。アヌラは来園前に後肢を怪我していたこともあってか、人に対する反応があまりよくなかったが、毎日トレーニングを続けることで担当飼育員にも慣れることができた。

コサラとアヌラはスリランカでは80頭ほどの群れで暮らしていたこともあり、東山動植物園にもともといたアジアゾウの「ワルダー」にも積極的に近づいた。しかし、ワルダーは１頭で生活していた期間が長かったため、２頭の仔ゾウに対して攻撃的な態度を示して寄せ付けなかった。そのため、互いの距離を少しずつ近づける、係留しながらスキンシップをさせるなどの試みを続けた結果、ワルダーが仔ゾウへ檻越しに餌を与えるなどのスキンシップを行うことができるようになり、互いに友好的な関係を築くことができた。

アジアゾウのコサラとアヌラ

○環境教育プログラム開始

近年の動物園では、自然科学への興味・関心を深めるほかに、環境保全のための行動変容を促す「環境教育」が重視されている。そこで、東山動植物園では平成19年に「東山動植物園環境教育基本計画」を策定し、１年ほどの準備期間を経て、平成21年に学校のような教育団体を対象とした環境教育プログラムを11種類開講した。その後も新たな講座の開発を続け、令和４年度時点では動物園が実施する講座が26種類、植物園が実施する講座が20種類、動物園ボランティアが開催する講座が８種類、視覚障害者を対象とした講座が３種類と、計57種類にまで増えている。それに伴って利用件数も増加し、平成21年には119件だった利用件数は、新型コロナウイルス感染症の影響がなかった平成30年には250件まで増加した。

本プログラムでは生きた動植物を題材として、生態系に関する問題に主軸を置いた様々な講座を用意している。これらの講座は、受講者が動植物に興味、関心を持ち、現状の問題点への理解を深め、環境問題に取り組むため

の足掛かりとして機能することを期待されている。

環境教育プログラム

2010年代（平成22年～）

○野生のホンドザル（ムコドノ）がニホンザル舎に侵入

平成22年４月29日の朝、ニホンザル舎の擁壁の上に、野生のホンドザルが現れた。その頃、本市で目撃されていた群れから離れた「はなれザル」ではないかと考えられている。当初は運動場横の木や擁壁に登る程度であったが、４月30日にニホンザル舎の中に侵入したため、獣舎の檻に入ったところを保護した。その後、周辺自治体に野生復帰のために放獣したいと相談したものの、受け入れる自治体がなかったため、東山動植物園の動物病院で検疫した後、飼育することとなった。当時、ホンドザルはメスのみで飼育されており、そこへ外からやって来たオスであることから、このサルは「ムコドノ」と名づけられた。

ムコドノがニホンザル舎に移動する際は、檻越しにメスとお見合いをする期間を設け、お互いに慣れた後に合流させた。合流後しばらくはメスとは離れた寝室にいることが多かったが、メスたちに認められた後は屋外で一緒に過ごす時間も増え、翌年７月には２頭の仔が生まれた。

○チャプルテペック動物園（メキシコ市）と姉妹動物園提携

名古屋市とメキシコ市は昭和53年２月16日に姉妹都市提携し、様々な分野において交流を深めてきた。東山動植物園とチャプルテペック動物園を介した交流では、東山動植物園からチャプルテペック動物園にクロヅル２羽とフンボルトペンギン15羽を送り、チャプルテペック動物園から東山動植物園にヒメコンドル５羽、クロコンドル５羽、メガネグマ２頭が送られていた。その後の平成24年８月７日に、東山動植物園とメキシコ市環境局の間で野生動物保全と繁殖に関する情報・技術の交流や、５年ごとの動物交換を行うための覚書が締結され、翌日の８月８日に東山動植物園とチャプルテペック動物園の間で姉妹動物園提携の協定書を取り交わした。

両園間での姉妹動物園提携後は、平成25年７月28日にアカカンガルー２頭とホンドタヌキ２頭をメキシコウサギ10頭と交換したほか、職員の技術研修等で交流を深めている。

チャプルテペック動物園との姉妹動物園提携式典

○ホンドザル（ムコドノ）が施設から脱走

平成24年10月15日、東山動植物園内で飼育していたホンドザルのオス１頭（ムコドノ）が

擁壁を超えて逃走した。当時、獣医師と飼育員がメスに避妊処置を行うため、１名を擁壁上に配置し、ほか８名が獣舎内に立ち入ってサルを獣室内に追い込もうとしていた。その際に屋外運動場にある鉄塔にサルが５頭ほど登り、そのうちの１頭であったムコドノが鉄塔からジャンプし擁壁を超えて脱走した。ムコドノの脱出以前にもメスのサルが脱出しており、対策として鉄塔には踏切防止ピンを設置していたが、今回の脱出時は、その踏切防止ピンの取付部を水平方向に踏切ってジャンプしたと考えられた。

ムコドノの脱走後は本庁職員まで動員した60名の監視体制を敷いて位置確認を行いつつ、捕獲箱による捕獲を試みた。数日間は園内での目撃報告こそあったが、捕獲箱では捕まらず、10月19日に名東区のアパート屋上で目撃されたのを境に園外で目撃されるようになった。そして10月21日14時に南区で撮影されたサルがムコドノであると判明し、獣医師と飼育員が現地に急行した。麻酔銃や捕獲ネットを使用して捕獲を試みた結果、17時頃に捕獲が完了し、無事動物園の検疫施設に収容された。

○高病原性鳥インフルエンザ発生

平成28年11月29日、陸地にてうずくまっていたコクチョウ１羽を見つけ、動物病院で加温や輸液の処置を行ったが、発見から３時間後に死亡した。急死であったことから高病原性鳥インフルエンザを疑い、同じ胡蝶池で飼育されていたほかのコクチョウ３羽を動物病院検疫施設で隔離飼育していたところ、そのうちの１羽が12月４日に死亡した。その際に実施したインフルエンザ簡易診断キットでの検査は陰性であったが、野鳥と同居できる開放施設で飼養していた鳥類（５種47羽）についても翌日から隔離飼育とした。

さらに、12月６日夜にコクチョウ１羽が死亡し、鳥インフルエンザ簡易診断キットで陽性と判定されたことを受け、園内の鳥類飼育施設を閉鎖し、連日鳥類施設周囲を消毒するとともに動植物園出入口各所に入園者用消毒踏込槽と車両消毒ポイントを設置して対応した。しかしながら、マガモやシジュウカラガンが相次いで死亡したため、12月11日から動物園エリアを閉園とした。その後も、隔離していたシジュウカラガンやマガモが死亡したほか、生存していたマガモ１羽とヒドリガモ１羽が高病原性鳥インフルエンザの確定検査で陽性となったため、感染拡大を防止するため安楽殺処分を行った。

全感染鳥（疑い含む）をバックヤードに隔離し、動物園全エリア消毒完了後からの21日間に新規発症がなかったため、平成29年１月２日に防疫措置を終了した。さらに再開園に向けた準備期間を経て１月13日に開園することができた。

高病原性鳥インフルエンザで死亡した鳥と同居していた鳥のうち、コクチョウ２羽とマガモ１羽はその後も隔離して飼育が続けられ、老衰で死亡したコクチョウ１羽を除いたコクチョウとマガモは、平成30年７月５日に高病原性鳥インフルエンザに感染しながら生き延びた「奇跡の水鳥」として再展示した。

鳥インフルエンザが発生した古代池

コラム

シャバーニの思い出

今や東山の顔（？）となったニシゴリラのシャバーニには来園前から関わってきました。

2003年の秋に東山動植物園と姉妹動物園提携をしているオーストラリアのタロンガ動物園へ、動物交流のウォンバットとコアラを受け取りに行きました。職員交流で東山動植物園に来たことがある飼育課長と話をしていたときに、突然雄のゴリラを要らないかと言われました。当時、東山動植物園には雌が3頭だけでしたので、即答で欲しいと返事をしました。

さらに、もう１頭別の雄の受け入れ先を頼まれました。その頃に日本動物園水族館協会のゴリラ繁殖計画では、上野動物園に他園のゴリラを集めて群れ作りをしていたので、帰国後すぐに上野動物園に連絡しました。

この２頭は13歳のハオコと10歳のシャバーニで、オランダの動物園で生まれ、群れでタロンガ動物園に移動して育ちました。雄は成長すると父親とトラブルを起こすようになり群れを出るので、タロンガ動物園でも群れから離して雄同士で飼育をしていました。

その後、煩雑な輸入手続き、それに1か月間過ごす検疫施設をオーストラリアのゴリラ飼育基準に適合するための改修費用が必要になり、当時の局長に説明すると、渋い顔で「高いけど、これがないとゴリラが来ないんだろ。」と言いながら許可していただいたのを覚えています。こうして2007年の夏にシャバーニが到着しました。

来園時のシャバーニは坊主頭の毛が伸び始めた中学生といった感じの若者でした。そのうち、運動場に張られた一本のロープを綱渡りすることが話題になり、マスコミが駆けつけ、また一般の方からの問い合わせなどの対応に追われました。その頃からスターの素質があったようです。

一方、飼育面では３頭の雌との同居計画を進めていました。当時、東山動植物園にいた雌は、推定51歳のオキ、推定35歳のネネ、その子で４歳のアイでした。しかし、オキはシャバーニを全く受け入れず、一緒にできませんでした。ネネは特に問題がなかったのですが、アイは初めての大人雄に戸惑い、時々ちょっかいを出したりして様子を伺っていました。シャバーニはアイのちょっかいが煩わしく我慢をしていましたが、ある日ついに爆発して、アイをボコボコにしてしまいました。それからは、シャバーニとネネ、オキとアイの２グループに分けていました。しかし、３年後にオキが死亡したのと同時期に、アイが大人になって、シャバーニはアイを受け入れるようになり、ようやく３頭の群れができました。

そして、2012年にネネがキヨマサを、2013年にはアイがアニーを出産しました。ところが、アイはうまく子育てができなかったので、アニーは人工哺育となり、それか

ら1年半は飼育係員たちが、将来は群れに戻す方針で母親代わりとなりアニーを育てました。こうして５頭の群れができ、飼育下の群れで生まれた子ども２頭が遊ぶ姿は、日本で初めての光景でした。

その後、シャバーニは2014年頃にSNSでカッコいいとささやかれ始め、2015年から本格的にイケメンゴリラで大ブレイクしました。国内だけでなく海外のマスコミでも取り上げられて、写真集の発行や100種を超える関連グッズの販売、CM利用などが行われ、事務方ではそれらへの利用基準作り、擬人化使用の規制など様々な課題に取り組んでいました。

とにかく東山総合公園の職員にとっては、シャバーニでの入園者増加はうれしい反面、毎日があわただしい日々でした。

橋川　央（元東山動物園長）

ブレイク当時のシャバーニ

コラム

思い出の記－アジアゾウの導入―

１　新たなアジアゾウの導入

東山動植物園再生プランが始動した2005年（平成17年）当時、私は飼育第一係長として本園エリアを担当していた。園内では、新たなコンセプトでの展示施設の改修がスタートし、繁殖の期待できる若いアジアゾウのペア導入が課題となっていた。海外の動物園などと動物導入の交渉を進めたところ、スリランカの動物園からクロサイのペアとの交換であれば、東山動植物園にアジアゾウのペアを譲ってもいいとの情報が得られた。スリランカ国内には約3000頭の野生ゾウが生息しており、もし保護区の周辺住民との間で深刻なトラブルに発展した場合は、やむを得ず親ゾウが殺処分されるケースがある。ゾウ保護施設（国立ピンナワラ・ゾウ孤児院）はそうした親を失った子ゾウの受け皿となっている。施設は1975年に創設、5頭の保護ゾウで運用を開始したとのことだが、当時はすでに80頭余りの群れに膨らんでいた。

２　スリランカへの渡航

2006年（平成18年）に東山動植物園への譲渡候補の個体リストができたので確認してほしい旨の要請があり、私とゾウ担当飼育員の2名で現地へ出赴いた。スリランカはインド洋に浮かぶ島国で、広さは北海道の0.8倍、気温は年間を通じて25～30℃で推移し、雨季・乾季がある。現地施設で毎日行われているゾウの群れ移動と川浴びは人気スポットで、多くの見学者が訪れていた。私たちは早速、来園候補のアジアゾウの個体と対面した。当園ではオスゾウの飼育経験が少なことから、オス個体の選定には慎重になっていた。現地のマフー（ゾウ使い）によると、オスゾウは、一般に7～8歳で性成熟を迎え、10歳くらいでメス群れでの同居はできなくなるという。また、『ムスト（マスト）』と呼ばれるオス特有の興奮期があり、人の指示に従わなくなったり、暴れたり、物を投げつけてきたりする兆候があり、そうなった場合には隔離して放置するとよいとの助言であった。スリランカ側から当初に示されたペア個体は、当時5歳の同い年であった。再生プランで新ゾウ舎のオス専用の隔離スペースや放飼場も確保される予定になっていたが、完成はまだ数年先であった。しかも、当時の旧ゾウ舎は、オス対策として広さ・強度に不安を残していた。もし、5歳のオス個体を受け入れた場合は、新施設への引っ越し前に性成熟するとトラブルも想定されることから、より若いオス個体の搬出を先方に要望し、話し合いにより、当時2歳のコサラへの変更で承諾をいただいた。

３　アジアゾウとクロサイのW繁殖

翌2007年（平成19年）、予定どおりアヌラ（当時6歳）とコサラ（当時3歳）がスリランカから来名した。そのペアは関係者の期待に応え、2度の繁殖に成功したのは皆さんもご

存じのとおりである。さて、私の2度目のスリランカ訪問は、交換動物であるクロサイの輸送同行で、こちらのペアもスリランカで繁殖に成功していた。そのため、3度目の訪問では嬉しいことがあった。動物園長就任後の2018年（平成30年）に、デヒワラ動物公園（クロサイ）と東山動植物園（アジアゾウ）のダブル繁殖の成功を称え合う式典を開催していただいたのだ。今後も両園の絆が深まり、スリランカと名古屋の友好が末永く継続することを願いたい。

黒邉　雅実（元東山動物園長）

アヌラ・コサラの故郷スリランカの川浴び

２　植物園

1980年代（昭和58年～平成元年）

○合掌造りの家の葺き替え

昭和31年に白川村から植物園へ移築された合掌造りの家は、昭和41年に屋根の葺き替えが行われ、昭和61年で移築からちょうど30年が経過し、雨漏りが発生するなど老朽化が進んだことから全面葺き替えとなった。白川村から13人が泊りがけで作業に取り組み、除去したカヤは４トン車で70台分、新しいカヤは直径1.2m、長さ1.8mが１束で、500束を要した。作業は１月下旬から３月中旬頃まで続き、総工費は2,780万円だった。

○お花畑整備

昭和62年に東山動植物園開園50周年を記念して「なごやHAPPYフェア」が開催されることになり、事業の中で芝生広場であったエリアが大花壇「世界のお花畑」として整備された。そのお花畑を流れる「四季のせせらぎ」は、東邦ガス株式会社より寄附（5,000万円）された水景施設で、スウェーデン生まれの彫刻家カール・ミレスの彫刻「天使の音楽家」の下から水が噴き出し、お花畑中央を蛇行して水盤型の噴水で終了する延長116mの流れである。世界のお花畑は翌年から規模が縮小され、「お花畑」と呼ばれるようになった。令和３年度からのお花畑再生整備事業により、四季のせせらぎは廃止された。

四季のせせらぎ

1990年代（平成２年～平成11年）

○植物ガイドボランティア制度発足

東山植物園ガイドボランティアは、平成４年３月に全国の植物園に先駆けて発足した。名古屋園芸同好みどり会・一木会の有志のほか一般公募により117名からスタートした。令和５年３月現在では、120名のガイドボランティアが登録され、毎日交代で園内の植物や施設の案内に携わっている。春まつり、秋まつりの期間中は、毎日園内のガイドツアーを開催し、来園者に植物園の魅力を伝えている。

植物園ガイドボランティア

○伊藤圭介日記第１集発行

伊藤圭介（1803～1901）は名古屋出身の植物学者で、「おしべ」や「めしべ」、「花粉」といった言葉は圭介によって生み出された。長崎への道中日記が『瓊浦游紀』（けいほゆうき）として残っており、この日記をはじめとして、圭介が日常を綴った明治31年（1898年）11月３日までの約240カ月の日記が、ご子孫から東山動植物園に寄贈された。圭介が文政10年（1827年）に記した『瓊浦游紀』の解読を、研究者の方々にご協力いただき、平成７年に『伊藤圭介日記第１集』として刊行した。現在も、「伊藤圭介文書研究会」という任意の研究会でご協力いただき、伊藤圭介日記は第28集まで刊行されている。

伊藤圭介日記

○「日本の風景音100選」に「東山植物園の野鳥の声」が選定

平成８年、環境庁（現環境省）では、将来に残していきたいと願っている音の聞こえる環境（音風景）を公募し、「残したい日本の音風景100選」を選定した。本市では環境局が応募し、「東山植物園の野鳥の声」が選定された。東山動植物園を含む東山の森は、都心に残された貴重な自然林として様々な野鳥が集ってくる。餌場として、繁殖場所として、渡りの中継場所としてなど、様々な目的で集まる野鳥が多く、繁殖期である５月頃は大変にぎやかになる。園内では、年間を通じて探鳥会が開催され、鳥の観察や鳴き声を聞くことを楽しみに植物園を訪れる人も多い。

○イベント「もみじ狩り」を開催

もみじのある植物園中央の谷筋は、日本庭園から也有園を中心に約60種類200本のもみじがあり、紅葉の時期は美しい景観となる。その紅葉を楽しむイベント「もみじ狩り」を開催することとなり、初年の平成11年は11月20日～28日の８日間、平成12年からは11月中旬から12月上旬までの期間の開催として現在まで継続されている。地下鉄でのアクセスが容易なことも魅力の一つであり、市内有数の紅葉の名所として親しまれている。

2000年代（平成12年～21年）

○東海の植物保存園供用開始

地質分布と関連した、湧水湿地と言われるこの地域に特徴的な自然環境が存在する。湧水湿地は通常の植物進出を阻み、湿地に適した植物だけが生育できるが、北方系、南方系の植物種が多種遺存し、植物地理学上この地域固有の植物を残した。それらは周伊勢湾要素植物群と言われる。

東海の植物保存園は、UFJ環境財団の寄附を受けて平成14年から平成17年までの４年をかけて整備された施設で、東海地方の固有種である周伊勢湾要素植物群等を保存対象植物として展示したエリアである。シデコブシ、マメナシ、ヒトツバタゴ、ハナノキ、サクラバハンノキ等の樹木のほか、草本ではウンヌケ、シュンラン、ショウジョウバカマ、ヒメカンアオイ、ヒメガマ等を展示している。

○日本植物園協会「植物多様性保全地域拠点園」に参加

日本の様々な環境に適応した種を守るためには、全国の植物園が得意な部分を分担し、力をあわせ気候・地域の特色を生かしながら行うネットワークが不可欠であることから、日本植物園協会は、植物園が協力して植物多様性保全を推進するための「植物多様性保全拠点園ネットワーク」を平成18年にスタートさせた。

そのネットワークのカテゴリーは、気候や地域で全国をエリア分けした上で連携して絶滅危惧植物の保全活動を推進する『地域野生植物保全拠点園』、得意とする植物群を優先的に収集・保存する『特定植物保全拠点園』、種子の長期保存と種子を使った保全を行う『種子保存拠点園』の３つに分けられている。

東山動植物園は平成18年12月18日に中部エ

リアの『地域野生植物保全拠点園』として「植物多様性保全地域拠点園」に参加した。

○温室前館重要文化財に指定

植物園の温室は、昭和12年の開園当初から公開している「前館」と「後館」がある。現存する後館は昭和35年以降に開館したものである。中央ヤシ室を中心に、左右に香りの有用植物室（旧シダ室）、多肉植物室、東西花卉室を配した前館部分は、現存する公共の植物園温室として日本最古のものであり、平成18年12月に国の重要文化財に指定された。前館が建設されたのは昭和11年であり、主要構造の接合には当時の最新技術である溶接を使っているため、歴史的な価値が非常に高い。

また、大東亜戦争時に行われた金属供出により、全国各地の金具類が取り外された中、先人の強い想いにより供出を免れた異例の建物である。

前館部分は、平成25年から令和２年までの７年間にわたって保存修理を行い、令和３年４月にリニューアルオープンした。それに合わせて、日本植物園協会の第56回大会を誘致し、また秋篠宮皇嗣殿下のお成りの予定があったが、新型コロナウイルス蔓延のため大会はリモート開催、殿下のお成りは中止となった。

名古屋市東山植物園温室前館

○桜の回廊供用開始

平成21年３月、東山動植物園再生プランに基づき桜の回廊がオープンした。コンセプトは、日本の園芸文化の根幹の一つである桜を日本全国から集め、その多様性を学ぶことができるようにするとともに、古来の景観を重視した里山のヤマザクラが咲く風景を創出することである。東山動植物園には全国のサクラ約100種類1,000本が植栽されており、桜の回廊には東の谷の低い方から早咲きの寒桜群、彼岸桜、大島桜、最上部に八重桜や菊桜と続き、３月上旬から４月下旬まで開花が楽しめる。

国際ロータリーの寄附により、平成29年度には30本、平成30年度には70本のヤマザクラや大島桜が植栽され、桜を楽しめる範囲が拡張された。

また、令和４年度からは、桜のライトアップを行う「宵の八重桜さんぽ」を開催しており、夜ならではの桜の美しさを体感することができる。

桜の回廊

○地域の自然学習林供用開始

平成21年４月、当時の「花の谷･不思議の森」を含む区域を再整備し、名古屋地域の湿地や草原、雑木林等の景観を再現した「地域の自然学習林」がオープンした。湿地や草原では、

トンボやバッタ、チョウ等の生息を促し、子どもたちが身近な生き物とふれあえる場を提供している。

また、湿地では地域の代表的な希少種であるシデコブシ群生地を保全・育成して、種の保存を図るとともに、早春の花の名所としての景観を創出している。雑木林は、かつての里山林の明るい疎林空間を復元し、里山林の利用と生き物との関わりを学ぶ場となっている。

2010年代（平成22年～）

○茶室　宗節庵供用開始

宗節庵（そうせつあん）は、平成24年に名古屋市在住の茶道師範、佐藤せつ子氏が私財を投じて建設し、本市に寄贈した茶室である。茶道師範としての茶名「宗節」にちなんで宗節庵と名づけられた。伊勢神宮の神楽殿や国府宮の儺追殿（なおいでん）等の設計で有名な木内修氏が設計、清水建設株式会社が建設した。その設計条件は、「東山動植物園也有園の景観保全を前提に幅広い世代の市民に活用される新しい茶室を伝統工法で実現する」という基本構想のもとに決められた。金物補強に頼らない伝統木造工法により耐震化架構体を採用し、耐震性、耐久性に優れた建物になっている。一般利用が可能で、使用日の３カ月前の月初めから東山総合公園事務局で受け付けている。

茶室「宗節庵」

○「奇跡の一本松」後継樹の植樹と「きずなの広場」供用開始

東日本大震災による津波被害を受け、高田松原の７万本の松は流されたが、唯一流されずに残った「奇跡の一本松」は、震災復興のシンボル、希望の象徴である。奇跡の一本松は海水によるダメージ等により、最終的に枯死してしまったが、国と民間の研究機関で枯死する前の松の枝を接ぎ木して育成した。

本市は震災直後から陸前高田市の行政機能を丸ごと支援し、平成26年には友好都市協定を締結するなど交流を深めてきた。行政丸ごと支援から10年の節目の令和３年３月23日に、両市の絆、友好都市のシンボルとして、陸前高田市から本市に「奇跡の一本松」の遺伝子を受け継ぐ後継樹が贈られた。「奇跡の一本松」後継樹は、東山動植物園に両市長らの手で植樹され、一角を「きずなの広場」（約100m^2）として整備し、案内板や奇跡の一本松実物の20分の１サイズのレプリカも設置した。

植樹した苗木は順調に生育しており、さらに接ぎ木による苗の増殖に取り組んでいる。

「奇跡の一本松」後継樹

コラム

日本植物園協会大会・総会について

令和３年度に日本植物園協会大会・総会が名古屋市で開催されることとなり、令和２年度末からその準備で慌ただしくなり始めた。平成28年度から秋篠宮皇嗣殿下が公益社団法人日本植物園協会の総裁にご就任され、当園では皇室をお迎えしての初めての大会・総会となった。コロナ禍で行事が自粛される中、宿泊を伴う久々のお成りになるとの位置付けで、宮内庁や関係部署との調整が始まった。開催方法について修正案が出る度に、追加資料を求められ、当時、新たに赴任したばかりの植物園長や担当係長を始めとした関係職員は多大な事務量をこなしていたことと思う。結果として、大会・総会は人数を制限しての開催となり、秋篠宮皇嗣殿下からはビデオレターでお言葉を頂く形となったため、殿下が楽しみにしておられた施設へのお成りや温室前館のご視察が叶わなかったことが誠に残念であった。

大会・総会の開催と併せて関連事業も開催した。ヤマザキマザック美術館での伊藤圭介関連資料の展示や、国際ロータリークラブの支援を仰ぎながら東山植物園の歴史を講談調にまとめたDVDを作成することができたことは大きな成果であった。両事業の実施にあたり、植物園に残されている資料の調査・整理を行う機会にもなり、一連の成果を残すことができたと感じている。

特に、DVDの作成に当たっては、東山植物園の開園当初からの歴史を調査し、OBの植物園長からも貴重な情報を直接聞くことができた。また、記録があまり整理されていなかった期間の情報を補完する作業を行うことができ、今回の年表作成にも活用できた。

植物園温室の前館は平成18年12月に国の重要文化財の指定を受けた。開園当初からの温室を歴代の植物園長が守り、今日までつないでこられたのは奇跡的なことであり、この貴重な温室はこれから先も守っていかなければならない市民の大切な財産である。現在進められている『東山動植物園再生プラン - 新基本計画』の目標は、「人と自然をつなぐ懸け橋」となることである。温室だけでなく、植物園職員の精神や貴重な植物コレクションが、未来永劫、いつまでもつながって行くことを願っている。

谷口　茂弘（元東山植物園長）

３　施設運営

施設

○スカイビュートレイン

スカイビュートレインは、動物園の正門駅から植物園駅の約２kmの区間を約20分で周遊する５輌編成、定員75人乗り、跨座式のモノレールで、先頭車、後尾車は電気を動力として用いる電気鉄道である。レール両側面に結合用のトロリー線を設け、車両側の集電装置（パンダグラフ）を通じて、電力が供給される構造となっている。公益財団法人東山公園協会が所有し、名古屋市都市公園条例に基づく設置許可により運営を行っている。

また、園内を周遊する遊戯施設と位置づけられており、鉄道事業法による定時運行は義務づけられておらず、お客様の状況を見ながら２編成での随時運行を行っている。

昭和61年12月中旬に着工し昭和62年３月21日に運行を開始した。当初は市制100周年（平成元年）に合わせて運行開始することを予定していたが、急遽開園50周年記念「なごやHAPPYフェア」（昭和62年）に合わせることとなった。

スカイビュートレイン

運賃は当初大人、子どもともに400円としたが、来園者からの要望があり平成元年に子ども料金を200円に変更した。平成８年に片道券制を導入し大人片道300円、１周500円、子ども片道150円、１周250円となった。

現在は、大人片道360円、１周600円、子供（３歳から）片道120円、１周240円となっている。

○東山展望塔（東山スカイタワー）

市制100周年を記念して動物園に隣接して建てられた東山展望塔は、デザイン都市名古屋を代表する優れた容姿で、塔の高さ134m（海抜80mの位置に立ち、塔の最高部は海抜214m）の市内有数の展望施設として平成元年７月11日にオープンし、市民から近県の人々まで広く親しまれている。「東山スカイタワー」の名称は愛称募集により応募総数9,051通の中から平成元年５月に決定した。平成３年には名古屋市都市景観賞を受賞している。

また、名古屋市消防局の防災無線中継基地局としての役割もあり、消防局以外にも愛知県警及び名高速の無線機器が設置され、防災拠点として極めて重要な施設となっている。

建設中の「東山スカイタワー」

平成18年４月１日には指定管理者制度が導入され、第１期は財団法人東山公園協会（現

公益財団法人東山公園協会）第２期から現在に至るまではサンエイ株式会社となっている。

また、平成18年に東山展望塔（東山スカイタワー）のイメージキャラクター「ノッピー」の愛称発表がされた。

東山スカイタワーのイメージキャラクター「ノッピー」

観覧料

種　別		大　人	名古屋市内在住65歳以上
普　通		300円	100円
団体	30人以上	270円	90円
	100人以上	240円	80円

【ライトアップ】

日没から入館終了時刻までタワーのライトアップを行っている。タワー頂上から塔体の四隅に沿って70wのナトリウム灯を116灯設置している。

【シースルーエレベーター】

宇宙空間のUFOとそれを取り巻く星雲をイメージさせるデザインをもち、窓越しに景色を見ながら昇降ができる。展望室までの昇降は全て２機（１機18人乗り）のエレベーターで行われている。

【レストラン】

７階最上階にあり、洋食を中心にして、喫茶からコースディナーまで幅広いサービスを行っている。（客席数90席）

新型コロナウイルス感染症の影響で、令和４年３月29日に一時閉店した。

【制震装置】

やじろべえのように１点で床に固定された約20tのおもりを揺らすことにより建物の揺れのエネルギーを吸収する。この装置により、タワーの揺れ幅は、６～７割程度に減少される。

展望室、スカイレストランの居住性を高める目的で４階展望室の中心に設置され、実物をガラス越しに見ることができる。

【防災無線機械室】

災害及び平常時に市役所と各区役所・消防署との無線通信を行う際の中継所となっており３階に無線機械室、３階から４階の中空部にパラボラアンテナ用デッキを設置している。

また、南北のアンテナ用デッキには、高感度カメラが設置され市防災指令センターで、市内全域を24時間監視している。

【指定管理者制度の導入】

平成15年に、公の施設の管理に民間の能力を活用することにより、住民サービスの向上を図るとともに、経費の削減等を図ることを目的とし、地方公共団体の指定を受けた者が

「指定管理者」として公の施設の管理を代行する指定管理者制度が平成15年に創設されたことから、本市でも平成16年から各所管局ごとに順次導入を進めていき、東山スカイタワーおいては、平成18年度から導入した。各期間の指定管理者は以下の一覧参照。

また、新型コロナウイルス感染症の影響で令和２、３年度は事業者にとって複数年の事業計画や収支計画を立てることが困難であることを勘案し、当該年度に終了する指定期間については原則１年延長するという全庁的方針から指定管理期間を５年間とした。

「指定管理者一覧」

	期間	指定管理者	応募者
第１期	平成18年度から平成22年度（４年間）	㈶東山公園協会（現（公財）東山公園協会）	①㈶東山公園協会（現（公財）東山公園協会）
第２期	平成22年度から平成25年度（４年間）	サンエイ㈱	①㈱トヨタエンタプライズ ②サンエイ㈱ ③㈶東山公園協会（現（公財）東山公園協会）
第３期	平成26年度から平成29年度（４年間）	サンエイ㈱	①中電興業㈱ ②サンエイ㈱ ③㈶（公財）東山公園協会 ④JIN共同事業体（㈱JTBコミュニケーションズ、㈱NTTファシリティーズ東海支店） ⑤東山スカイタワーコンソーシアム（㈶地球子ども村、サンエス㈱）
第４期	平成30年度から令和３年度（４年間） ※新型コロナウイルス感染症の影響で令和４年度まで延長	サンエイ㈱	①サンエイ㈱
第５期	令和５年度から令和９年度（５年間）	サンエイ㈱	①サンエイ㈱

〇東山テニスセンター

東山テニスセンターは、平成６年に開催された第49回国民体育大会（わかしゃち国体）のテニス会場として建設されたもので、平成２年に着工し、平成５年７月にオープンした。総工費約39億円をかけてセンターコート１面、屋内コート４面、屋外コート15面の計20面のコートと管理棟、駐車場を整備した。敷地面積は約8.6haで、コートは砂入り人工芝で国内でも有数のテニス施設である。平成８年から10年には国際テニス連盟主催によるワールドジュニアテニス選手権大会等の国際大会で使用しており、平成12年にはジャパンオープンジュニア選手権が開催された。緑に囲まれた起伏のある植栽がなされ、憩いの場としても利用されている。

令和２年度からは組織改編により、スポーツ市民局へ移管された。

【指定管理者制度の導入】

東山テニスセンターにおいては、指定管理者制度を平成18年度から導入した。各期間の指定管理者は以下の一覧参照。

空から見た東山テニスセンター

東山テニスセンター

「指定管理者一覧」

	期間	指定管理者	応募者
第１期	平成18年度から平成21年度（４年間）	㈶東山公園協会 （現（公財）東山公園協会）	①㈶東山公園協会（現（公財）東山公園協会） ②㈱JPN
第２期	平成22年度から平成23年度（２年間）	㈶東山公園協会 （現（公財）東山公園協会）	①㈶東山公園協会（現（公財）東山公園協会） ②㈱石黒
第３期	平成24年度から平成27年度（４年間）	岩間・大矢・NGTCグループ （構成法人：岩間造園㈱、大矢建設㈱、名古屋グリーンテニス㈱）	①石黒体育施設㈱ ②岩間･大矢･NTGCグループ ③奥アンツーカ㈱ ④三幸 ⑤シーエヌエヌグループ ⑥（公財）東山公園協会・日本フィールド共同企業体
第４期	平成28年度から平成31年度（４年間） ※令和２年度からはスポーツ市民局へ移管	東山の森３Ｍパートナーズ （構成法人：美津濃㈱、ミズノスポーツサービス㈱、（公財）名古屋市みどりの協会）	①東山の森３Ｍパートナーズ ②岩間・ダンロップテニスサービスグループ

管理・運営

〇開園時間の変更

平成５年に当時午前９時30分だった開園時間が午前９時に変更となった。

現在の東山動植物園の開園時間は午前９時から午後４時30分まで（但し、閉園時間は午後４時50分）で、東山スカイタワーは午前９時から午後９時（但し、閉館は午後９時30分）である。休園日は12月29・30・31、１月１日及び毎週月曜日（但し、月曜日が国民の祝日又は振替休日の時はその翌日が休園日）となっている。

〇入園料改訂

S63.４.１　普通券　大人　400円
　　中学生以下無料
　　定期観覧券　9,600円
　　半年間定期観覧券　6,400円
　　30人以上の団体　大人360円
　　100人以上の団体　320円

Ｈ６.４.１普通券　大人　500円
　　中学生以下無料
　　定期観覧券　12,000円
　　半年間定期観覧券　9,000円
　　30人以上の団体 大人450円
　　100人以上の団体　400円

H18.４.１　普通券　大人　500円
　　中学生以下　無料
　　市内在住65歳以上　100円
　　定期観覧券
　　大人　2,000円
　　市内在住65歳以上 600円
　　30人以上の団体
　　大人　450円
　　市内在住65歳以上 90円
　　100人以上の団体
　　大人　400円
　　市内在住65歳以上 80円
　　スカイタワー共通券※
　　大人　640円
　　市内在住65歳以上 160円
　　※平成10年から導入

本市では、施設の持続的・安定的な運営を続けていくため、施設の性格に応じた公的関与の度合いや収益性等に基づき、管理運営費と使用料との関係について基準をつくり平成18年に使用料を改訂した。

「入園料の変遷」

「入園料の変遷」年月日	普通券		定期観覧券	半年定期観覧券	30人以上の団体		100人以上の団体		
	大人	中学生以下	大人	大人	大人	中学生以下	大人	中学生以下	
S63.４.１	400円	無料	9,600円	6,400円	360円	無料	320円	無料	
Ｈ６.４.１	500円	同上	12,000円	9,000円	450円	同上	400円	同上	
H10.４.１	500円	同上	12,000円	8,000円	450円	同上	400円	同上	スカイタワーとの共通券 大人800円 販売開始

施設の性格に応じた公的関与の度合いや収益性等に基づき、管理運営費と使用料との関係について基準が変更↓

<table>
<tr><td rowspan="3">年月日</td><td colspan="2">普通券</td><td>定期観覧券</td><td colspan="2">30人以上の団体</td><td colspan="2">100人以上の団体</td><td rowspan="3"></td></tr>
<tr><td>大人</td><td rowspan="2">中学生以下</td><td>大人</td><td>大人</td><td rowspan="2">中学生以下</td><td>大人</td><td rowspan="2">中学生以下</td></tr>
<tr><td>市内在住
65歳以上</td><td>市内在住
65歳以上</td><td>市内在住
65歳以上</td><td>市内在住
65歳以上</td></tr>
<tr><td rowspan="2">H18. 4. 1</td><td>500円</td><td rowspan="2">無料</td><td>2,000円</td><td>450円</td><td rowspan="2">無料</td><td>400円</td><td rowspan="2">無料</td><td rowspan="2">スカイタワー共通券
大　人　　640円
65歳以上　160円</td></tr>
<tr><td>100円</td><td>600円</td><td>90円</td><td>80円</td></tr>
</table>

〇新型コロナウイルスによる影響

東山動植物園では、新型コロナウイルス感染症への対応として令和２年２月29日から３月31日（延長あり）まで一部閉館（世界のメダカ館、自然動物館、動物会館、植物会館、温室）を行ったのが始まりである。

その後の対応として、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から愛知県に対し緊急事態宣言が発出され、一部閉館だけでなく令和２年４月10日から令和２年５月10日（延長あり）まで臨時閉園となった。令和２年６月２日から再開園したものの、感染拡大防止策として、Yahoo!JAPANが運営する「PASSMarket（パスマーケット）」の予約システムを導入し入園者を5,000人程度に制限した。例年夏に行っている「東山動植物園ナイトZOO」は中止となったものの、秋の多客日は、事前予約制を導入して開園した。

しかしその後、愛知県に対し再び緊急事態宣言が発出され、令和３年１月19日から３月７日（延長あり）まで5,000人を超える場合入園制限有りの条件をつけ通常開園した。

緊急事態宣言は解除されたものの「東山動植物園春まつり」が始まり混雑が見込まれることから、令和３年３月13日から５月９日の間で土日祝日は事前予約制を再度導入し開園したが、愛知県に対してまん延防止等重点措置が実施されたこともあり事前予約制を５月11日まで延長、さらに、再び緊急事態宣言が発令され令和３年５月31日まで再延長された。緊急事態宣言の延長に伴い、令和３年５月29日から５月30日は臨時閉園と決定した。その後、緊急事態宣言は解除され令和３年６月21日から７月11日までの間、再び5,000人を超える場合入園制限有りの条件をつけ通常開園した。

令和３年７月13日からは愛知県厳重警戒措置が実施されたが、制限なしの通常通りの開園となった。

しかし、愛知県が再びまん延防止等重点措置を実施したことで令和３年８月８日から８月31日まで条件付きの開園となった。

また、「東山動植物園ナイトZOO&GARDEN」は中止となった。※平成30年から続いていた温室前館・洋風庭園の工事が終了したことに伴い、令和３年度から「東山動植物園ナイトZOO」から「東山動植物園ナイトZOO&GARDEN」に再変更したものである。

さらに、愛知県に再び緊急事態宣言が発出されたことから令和３年８月27日から９月12日まで条件付き開園を延長した。

また、「東山動植物園秋まつり」・「もみじ

狩り」も始まることから令和３年９月18日から12月５日まで土日祝日に事前予約制を導入した。「紅葉ライトアップ」には事前予約制は導入しなかったものの１日2,000人程度の制限があった。その後は通常開園だったが、「東山動植物園春まつり」期間である令和４年３月19日から５月８日までは、事前予約制を導入した。

令和４年８月には、「東山動植物園ナイトZOO&GARDEN」を、事前予約制を導入して実施した。

「新型コロナウイルスに係る対応一覧」

期　間	対　応
令和２年２月29日から３月31日（延長あり） （「東山動植物園春まつり期間」）	一部閉館（世界のメダカ館、自然動物館、動物会館、植物会館、温室）
令和２年４月10日から令和２年５月10日（延長あり） （「東山動植物園春まつり期間」）	臨時閉園
令和２年６月２日以降	再開園（Yahoo!JAPANが運営する「PASSMarket（パスマーケット）」の予約システムを導入し入園者を5,000人程度に制限） 一部閉館継続
令和２年８月中旬	「東山動植物園ナイトZOO」中止
令和２年９月19日から11月29日 （「東山動植物園秋まつり期間」）	土日祝日に事前予約制を導入し開園
令和３年１月19日から３月７日（延長あり）	通常開園（入園者を5,000人程度に制限）
令和３年３月13日から５月31日（延長あり） （「東山動植物園春まつり期間」）	土日祝日・一部平日に事前予約制を導入し開園
令和３年５月29日、30日（変更あり）	緊急事態宣言の延長があり臨時閉園に変更
令和３年６月21日から７月11日	通常開園（入園者を5,000人程度に制限）
令和３年７月13日以降	通常開園
令和３年８月８日から８月31日	通常開園（入園者を5,000人程度に制限）
令和３年８月13日、14日、15日、21、22日、28日、29日	「東山動植物園ナイトZOO&GARDEN」中止 通常開園
令和３年８月27日から９月12日	通常開園（入園者を5,000人程度に制限）
令和３年９月18日から12月５日 （「東山動植物園秋まつり期間」）	土日祝日に事前予約制を導入し開園 （午前９時から午後２時の間のみ）
令和３年12月６日以降	通常開園
令和４年３月19日から５月８日 （「東山動植物園春まつり期間」）	土日祝日に事前予約制を導入し開園 （午前９時から午後２時の間のみ）
令和４年８月５日、６日、７日、13日、14日20日、21日	事前予約制を導入し「東山動植物園ナイトZOO&GARDEN」開催 （午後１時から午後８時の間のみ）

催事

○東山動植物園開園50周年記念事業「なごやHAPPYフェア」

東山動植物園の開園50周年を記念して、動植物と人間とのふれあいを通じて、多くの人々に「愛と夢」を与え、かつ21世紀の新しい動植物園像を確立することをテーマとする記念事業を大規模な祭典として開催し、幅広い入園者の誘致を図り、夢と活力あるまちづくりを推進することを趣旨とした。

開催期間は、昭和62年３月21日（土・祝）から５月31日（日）までの72日間で、市長を会長とする「なごやHAPPYフェア開催委員会」（名古屋市、名古屋商工会議所、中日新聞社、名古屋タイムズ社、中部日本放送、東海テレビ放送、東海ラジオ放送、名古屋市観光推進協会、東山公園協会）が主催した。期間中入園者150万人を目標に掲げ、期間を通じての入園者数は1,701,108人となった。

なお、当該催事期間中の５月４日に１日の最多入園者である149,008人を記録した。入園料については、大人1,000円、中人（中学・高校生）500円、小人（小学生）300円、名古屋市敬老手帳、身体障害者手帳等持参者500円とした。

動物園では、催事期間中、本園に鉄骨・モルタル造りの樹高20mのバオバブの木を中央に設置し、フタユビナマケモノ、ヤブイヌ、フェネックの３種の夜行性動物を昼夜逆転する形で展示等する「テーマ館・ビッグツリー」、北園に子どもたちが動物たちとふれあえ、ゾウやゾウガメ等に乗ることができる「動物プレイランド」等を設置した。

植物園では、芝生広場を面積約3,600m^{2}の「世界のお花畑」として整備し、３月20日に完成した。

また、お花畑の中央を流れる「四季のせせらぎ」は東邦瓦斯株式会社の寄附により整備され、３月15日、フェアのオープンに先立ち通水式が行われた。その他、温室前館前には、期間中、「はな館」、「はっぱ館」及び「ねっこ館」の３つのパビリオンからなる「植物展示館」が設置され、「はな館」においてはアリゾナ州ツーソン日米協会名誉会長のバーバラ・ブレア氏の協力によりベンケイチュウが導入され展示された。

そのほか「なごやHAPPYフェア」を契機に園内を遊覧するモノレールである「スカイビュートレイン」が財団法人東山公園協会によって設置され３月21日に運行を開始し、遊園地の大観覧車も３月８日に運行を開始した。

なお、「なごやHAPPYフェア」の収支差額は全額本市に寄附され、当該収支差額により、サガロ温室及び動物リハビリ施設が建設された。

テーマ館「ビッグツリー」

○東山動植物園開園60周年記念事業「生きいきフェスタ東山'97」

東山動植物園の開園60周年を記念して、人・動物・植物という地球上で生きている仲間たちが、生命の素晴らしさに感動し、ともに触れ合い、ともに生きる喜びを感じることをテーマとして、幅広い入園者の誘致を図

り、時代が求める新しい動植物園像の確立を推進することを趣旨とした。

開催期間は、平成９年３月20日（木・祝）から６月１日（日）までの74日間で、市長を会長とする東山動植物園開園60周年記念実行委員会（名古屋市、中日新聞社、名古屋タイムズ社、中部日本放送、東海ラジオ放送、東海テレビ放送、東山公園協会）が主催した。期間中入園者100万人を目標に掲げ、期間を通じての入園者数は950,774人となった。入園料を大人（高校生以上）900円、小人（小・中学生）300円、名古屋市敬老手帳持参者300円とし、財源確保のためイベント宝くじ「生きいきフェスタ東山'97トリプルマッチ」が発売された。

動物園においては、開園60周年記念施設として現在の日本ゾーンにあたるこども動物園（ふれあい広場、タヌキの里、小鳥とリスの森、サルの山等）が、平成７・８年度に整備され平成９年３月16日に完成式が行われた。

こども動物園完成式

また、開園60周年を祝し「琉球松あずまや」及び「シーサーのオブジェ」が、コアラのユーカリ栽培の委託先である名護林業生産加工販売事業協同組合から、コアラ舎出口付近広場に寄贈された。

なお、シーサーのオブジェについては現在も出口付近に残存している。主な催事としては、動物園60周年歴史展や世界の動物園大ポスター展、子ゾウとのふれあいコーナー、動物ミニ村等が開催された。

植物園では、「もっと自然と話をしよう」をメインテーマに、植物園を『植物王国』としてイベントを展開し、植物園門近くに樹高15mまでの縄文杉のレプリカが設置されたほか、お花畑と星が丘門を結ぶ散策路と植物見本園「花の谷・不思議の森」が整備され、不思議の森には東邦ガス株式会社からの寄附により制作された常滑市在住の陶芸作家・吉川千香子氏のオブジェが設置された。

○東山動植物園開園70周年記念事業「体感王国東山　～ZOOっといっしょ　木っといっしょ～」

東山動植物園の開園70周年を記念して、生命の尊さや自然環境の大切さを伝え、東山動植物園の魅力を再発信するとともに、再生のプロローグとすることを目的とした。

開催期間は、平成19年３月17日（土）から６月３日（日）までの79日間で、緑政土木局長を会長とする東山動植物園開園70周年記念実行委員会（名古屋市、中日新聞社、名古屋タイムズ社、中部日本放送、東海テレビ放送、東海ラジオ放送、東山公園協会、東山公園協賛会）が主催した。期間中入園者100万人を目標に掲げ、期間を通じての入園者数は1,013,782人となった。入園料については、特別に定めず通常料金とした。

動物園では、開園70周年記念事業としてライオン舎に、水濠を渡り運動場に設けた観覧スペースから間近に観察できる「ワ～オチューブ」を設置した。

また、カンガルー舎内に観覧通路を設け、間近に観覧できる「カンガルー広場」、コアラの屋外運動場に特設デッキを設置し、間近に

観察できる「コアラの森のさんぽ道」を設置した。そのほか「キリンの展望デッキ」、動物とふれあえる「仲良し広場」、動物会館の「70周年記念展示」等が開催された。「ワ～オチューブ」については、最大60分待ちを記録した。

ワ～オチューブ

植物園では、全長約200m、高低差約28mの東海圏で最大級のローラーすべり台「樹快ダー」を設置した。「樹快ダー」の並び時間は最大150分待ちを記録した(樹快ダーは平成23年度に撤去された)。そのほかに、平成17年11月に市長がシドニー市を訪問した際にプレゼントを約束され、平成18年４月名古屋に到着してバックヤードで養生、育成していた「ジュラシックツリー（ウォレンパイン)」について、70周年事業開始日に一般公開を開始した。その他、市民ボランティアと協働で実施した「『合掌造りの家』屋根の葺き替え」や、子どもたちが植物園生まれのカブトムシの幼虫を土の中から掘り出して持ち帰ってもらう「身近な自然発見プログラム『カブトムシを育てよう！』」等が開催された。

○東山動植物園開園80周年記念事業「体験！仰天！東山！ Higashiyama 80th」

東山動植物園の開園80周年を記念して、来園者がより一層動植物に親しみ、生命や自然環境の大切さを体感・体験できる機会を提供し、また、東山動植物園の再生整備が始まって10 年目にあたることから、記念事業と再生事業を相互に連携させることで、更なる東山動植物園の魅力を発信していくことを趣旨とした。開催期間は、平成29年３月18日(土)から６月４日(日)までの79日間で、緑政土木局長を会長とする東山動植物園開園80周年記念実行委員会（名古屋市、中日新聞社、CBCテレビ、CBCラジオ、東海テレビ放送、東海ラジオ放送、東山公園協会、サンエイ、日本プロパティマネジメント、トヨタエンタプライズ、東山遊園)が主催した。期間中入園者110万人を目標に掲げ、期間を通じての入園者数は869,846人となった。入園料については、特別に定めず通常料金とした。

動物園では、開園80周年記念施設として、スマトラトラの迫力ある姿を間近で観察できる「猛獣に遭遇！？ドキドキスマトラトラ」、ユキヒョウがジャンプしながら上下に移動する姿を下から観察できる「―高い所が大好き！―ぴょんぴょんユキヒョウ」を設置した。そのほかにアフリカゾウの骨格標本展示、恐竜像の補修・補強及び広場の整備、アクシスジカ展示の拡張等が実施された。

ドキドキスマトラトラ

植物園では、自然を満喫しながら滑り降りる日本最大級サイズのロープウェイ遊具「―

空中をかけぬける！―スカッとターザンロープ」、植物や東山の歴史を学びながら間伐材を使用した迷路を楽しめる「―豆知識がいっぱい！―木ままな迷路」を期間限定で設置した。

また、「ターヘル・アナトミア」等の特別公開を行ったほか、世界最大のサボテンであるベンケイチュウを導入し、植え込み見学会を行った。このベンケイチュウは植物では東山動植物園初となる愛称募集を平成29年５月23日から実施し、７月２日に「サボチュウ」と命名された。

○ライトアップイベント

• ナイトZOO＆GARDEN

平成19年度に夏の酷暑時の入園者を増加させるため、夕方から夜間の涼しい時間に開園する「ナイトZOO」の開催を始めた。初年度は３日間開催し、入園者数の合計は約28,000人となった。その後、平成22年には開催エリアを植物園まで拡大し、「ナイトZOO＆GARDEN」として開催した。

なお、平成22年度については期間中の入園者は156,403人となり過去最多となっている。

その後、平成24・25年度においては、再生工事（アジアゾウ舎）による園路の狭小化により、来園者の安全性を考え「ナイトZOO＆GARDEN」を中止し開園時間を18時50分までの２時間延長に短縮した「夕暮れ・お散歩・ひがしやま ～夏の開園延長～」を開催した。その後、平成26年度に再開したが、平成30年度からは温室前館・洋風庭園の工事に伴い動物園エリアのみの開催となった。令和２・３年度においては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により中止となったが、令和４年度は入園制限を設けて３年ぶりに、リニューアルした重要文化財温室前館をはじめとした植物園エリアも含めて開催した。

ナイトZOO＆GARDEN開催の様子

• 紅葉ライトアップ

もみじのある植物園中央の谷筋は、市内有数の紅葉の名所である。平成25年度に６日間試行で植物園の一部エリアを20時30分まで開園延長し、以後、毎年「紅葉ライトアップ」を実施している。日本庭園から也有園を中心に約60種類200本のもみじのコレクションがライトアップされ、特に奥池に映る「逆さもみじ」が人気である。平成30年度には、期間中入園者数は167,020人を記録し最多となった。

なお、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、令和２年度は開催を中止するとともに、令和３年度は平日に入園制限を設けて開催した。令和４年度から、通常通りの開催に戻った。

紅葉ライトアップ開催の様子

• 宵の八重桜さんぽ

約100種類1,000本の桜が観賞できる植物園において、令和４年度から桜のライトアップイベントである「宵の八重桜さんぽ」を開始した。平成21年にオープンした「桜の回廊」の八重桜を中心にライトアップし、昼とは異なる雰囲気を楽しむことができる。令和４年度は８日間開催し、期間中の入園者数は110,268人となった。

宵の八重桜さんぽ開催の様子

○名古屋市営動物園開園100周年記念イベント

本市としての最初の動物園は、大正７年４月１日に鶴舞公園内に「名古屋市立鶴舞公園付属動物園」として開園し、昭和12年に現在の東山公園に移転するまでの19年間市民に親しまれた。鶴舞時代から築かれてきた「楽しむ」「種の保存」「教育」等の理念は今日まで受け継がれている。そして、平成30年に名古屋市営動物園が開園して100周年を迎えたことを記念して、東山動植物園と鶴舞公園でイベントを開催した。

東山動植物園動物会館と鶴舞中央図書館では、鶴舞時代の写真を織り交ぜながら名古屋市動物園100周年の歴史を紹介する、「記念パネル展　名古屋市動物園100年の軌跡」を平成30年３月17日から開催した。

東山動植物園では、鶴舞時代から飼育しているゾウやクマ、ワニ等約60種の動物種の中から選定した動物について飼育員が解説する「100周年記念アニマルトーク」を実施した。そのほかに、特設サイトにて鶴舞時代から現在までの変遷を写真を中心に紹介したり、鶴舞時代と現在の動物の様子を、VR技術を用いた写真で比較できる取り組みが行われたりした。

鶴舞公園では平成30年４月８日に、「名古屋市動物園開園100周年記念セレモニー」を行い、「鶴舞の一日動物園」を開催した。「鶴舞の一日動物園」ではヤギやモルモット等のふれあい体験や動物の骨格標本の展示、紙芝居等のイベントを行い、参加者は約3,000人となった。

また、「名古屋市の戦前の動物園動物」という記念誌を東山公園協会に所属する東山動植物園のOBが作成した。

名古屋市営動物園100周年記念式典

100周年記念ロゴ

企業等の参画

東山動植物園再生プラン新基本計画素案に基づき、平成22年１月に企業から東山動植物園の企画や運営等に広く参画してもらうため、寄附・イベントの協賛・バナーやマップ広告等、企業参画の募集を開始した。

○寄附等の支援

東山動植物園再生プランを推進することを目的とし、継続的に金銭等の支援を受けられるように、長期協定「東山動植物園再生プランに関する連携と協力の協定」を平成22年12月から計７社と締結した。そのほかにも、サービス向上等の支援が円滑に行われるように個別で覚書を締結した。

平成24年12月には「動物スポンサー」の募集を開始した。「動物スポンサー」は、法人が１動物種若しくは１個体につき一口200,000円（年額）のスポンサー料で、東山動植物園で飼育している動物のスポンサーになる制度であり、スポンサー料は対象動物のエサ代等の財源に充てている。令和４年度末時点では60社76口のスポンサーがおり、継続的な支援が得られている。

平成25年８月には、東山動植物園の運営に多くの人が参加し、皆で一緒に動植物の命を未来につなげていくことを目的として「東山動植物園みんなで応援募金」を開始した。同募金は、一口500円で記念品としてピンバッジとカードを渡していることもあり、平成26年には過去最多である8,211,000円を記録するなど、募金開始後10年以上経過した現在でも来園者に募金していただいている。

その後、市民等からの寄附の申し出が増えてきたことを背景に、寄附金の受け入れ態勢を整えるため、令和２年３月には「名古屋市東山動植物園基金」（通称:東山動植物園いのちつなぐ基金）を創設した。これより寄附金を基金に積み立てることができるようになり、新施設の整備等に、単年度ではなく複数年度にわたり計画的に活用できるようになった。

そして、令和３年７月には支援の輪をより一層拡げるため、法人を対象とした新たな支援制度「いのちつなぐパートナー制度」を開始した。同制度はいのちつなぐ基金へ一定額以上の支援をした法人を「いのちつなぐパートナー」として、基金への支援実績に応じて４段階のランクに認定するものである。令和４年度末時点では13社を認定した。同制度開始とともに、上記の長期協定を結んでいた企業はすべて同制度の最高ランクである「プラチナパートナー」へと移行した。

令和４年２月には、少子高齢化等による社会情勢を背景に、遺言により財産を寄附する遺贈寄附が増加したため、寄附者の意思が円滑に実現できるように、プラチナパートナーである金融機関と「遺贈寄附に関する協定」を締結した。

○第一期営業施設・第二期営業施設の整備

東山動植物園再生プラン新基本計画のうち「にぎわいのある快適な園内空間の創出」に向け、園内の飲食･物販施設を充実させるため、民間活力を活用した手法で新な飲食・物販施設の整備を進めた。

新たな動物舎や休憩施設、営業施設等の整備に伴い、22の既存売店に移転交渉を行った。そのうち20の売店は平成23～27年度に移転を終え、第一期営業施設・第二期営業施設の整備を行った。

平成23年９月に第一期営業施設の公募を開始した。平成24年１月に整備事業者が決定し、平成25年４月には動物園本園に新営業施設「ひがしやまパレット上池」がオープンし

た。「ひがしやまパレット上池」は飲食店施設である「メゾン・ド・ヴェール」と物販施設である「ズー・デ・ガッテン」で構成されており、総面積は約366m^{2}ある。その後同年９月、植物園に新営業施設「ガーデンテラス東山」がオープンした。「ガーデンテラス東山」はウェディングにも対応した多目的レストランであり、結婚式場としても利用されている。「ズー・デ・ガッテン」は令和５年１月にリニューアル工事のため閉店し、同月新たに「ようこそ！ズーボの森」がオープンした。

また、東山動植物園再生プラン新基本計画に基づき、平成25年９月に第二期営業施設の公募を開始した。平成26年２月に整備事業者が決定し、平成27年に飲食施設である「ZOOASIS　WEST」が先行してオープンした。続いて、平成28年３月に飲食施設である「ZOOASIS EAST」と物販施設である「ZOOBOGATE」がオープンした。

ZOOBOGATE

その後、令和４年11月に「ZOOASIS WEST」のテナントを入れ替えた。

○ブランド戦略事業、公式ロゴ・シンボルマーク、マスコットキャラクター

平成24年10月に東山動植物園ブランド戦略を展開するために「東山動植物園ブランド戦略パートナー」の募集を開始した。東山動植物園ブランド戦略とは、「長い歴史のある『東山動植物園ブランド』を市民からより多くの共感を得て、より親しみやすいものに高めていこう」とするものである。平成25年２月にブランド戦略パートナーが決定し、公式ロゴ、シンボルマーク、キャラクター等のブランドシンボルの作成やブランドシンボルのライセンス管理事業が提案された。同年４月に公式のロゴマーク等の決定を発表し、開園以来、東山動植物園の公式のロゴマーク等が決定したのは初となった。その中でマスコットキャラクターの愛称募集が行われ、その結果、動物園と植物園が一体となっているという、東山動植物園の最大の特徴が分かりやすく表現されていることから、愛称は「ズーボ」に決定し、平成25年７月 15 日に、「命名式・お披露目会」が開催された。

ズーボと公式シンボル・ロゴマーク

その後、東山動植物園の公式ロゴマーク等を使用した公式ライセンス商品が展開され、令和４年度末時点では300種類を超える公式ライセンス商品が園内売店を中心に販売されている。

４　東山動植物園再生プランの推進

概要

東山動植物園は、昭和12年３月の開園以来、市民の憩いの場として親しまれてきたが、平成17年当時、開園から約70年を経て、動植物園の果たすべき役割・使命の変化への対応、施設の老朽化、レジャーの多様化等を受けての入園者数の減少といった課題が生じていた。

そこで、日本国際博覧会(愛・地球博)の理念を継承し、東山動植物園の再生を図るべく、平成17年度に外部有識者13名からなる「東山動植物園再生検討委員会」を設置した。検討委員会が平成18年３月に提出した提言書に基づき、本市は同年６月に「人と自然をつなぐ懸け橋へ」を目標に掲げる「東山動植物園再生プラン基本構想」(以下「基本構想」という。)を策定した。その後、平成19年６月には展示等の基本的な考え方や施設整備の方針等を示した基本計画を策定し、事業に着手した。

その後、社会情勢の変化等に対応するため基本計画を見直すこととした。有識者を加えた「東山再生プラン「楽しみと賑わいの創出」ワーキング」や、小学生、中学生、高校生からなる「東山再生子ども委員会」、後述する「東山再生フォーラム」を開催しながら、実施時期、規模、内容等身の丈にあったものにするとともに、「現存する歴史文化的施設や樹木、景観に配慮する。」「市民により一層楽しんでいただく。」という２つの新たな視点を加え、平成22年５月、改めて東山動植物園再生プラン新基本計画（以下「新基本計画」という。）を策定し、事業を進めている。

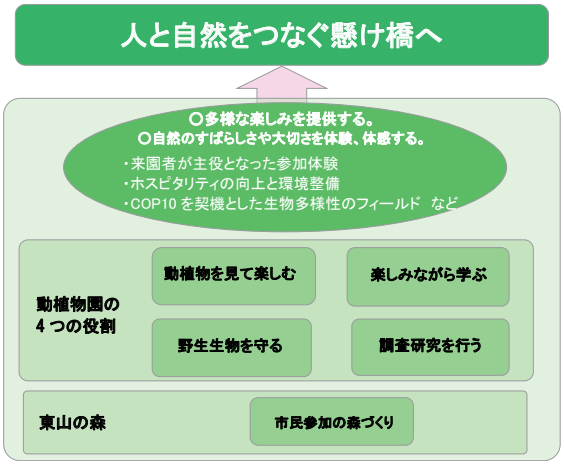
なお、基本構想に先行し、本市は平成15年７月、「なごや東山の森づくり基本構想」を策定している。これは、東山公園と平和公園を合わせた区域を「なごや東山の森」と名づけ、主に市民協働による森づくりの視点を中心に東山の森づくりの基本的な方向性を示したものであり、新基本計画も、このなごや東山の森づくり基本構想を踏まえて策定されている。

新基本計画の基本フレーム、目標等

新基本計画は、東山動植物園の再生及びそれを核とした約400haの東山の森づくりを行うとともに、ひいてはその周辺地区のまちづくりを目指すものである。

動植物園では、動植物園の持つ４つの役割を果たすため、主に展示、環境教育、種の保存、調査研究を、東山の森では市民参加による森づくりを展開することにより、自然のすばらしさや大切さを体験、体感するとともに、市民の様々なニーズに対応した楽しみを提供するフィールドとすることで、「人と自然をつなぐ懸け橋」に生まれ変わることを目標としている。

また、市民が誇れる動植物園として本市の観光拠点となることも目指している。



新基本計画の目標

新基本計画は、開園100周年となる令和18年度までを事業期間とし、全体事業費は約350億円と想定している。

また、年間目標入園者数は過去最高入園者数（S44年339万人）を超える350万人となるよう最大限努力していくとした。

また、25年を超える長期の計画であるため、おおむね５年ごとに事業計画の見直しを行うものとしている。これに基づき５年ごとに事業計画を策定しており、現在は令和２年度から開始した第三期の事業計画に基づき事業を展開している。

《主に整備に係る取り組みについて》

新基本計画における動植物園の全体配置計画では、動植物園に15のゾーンを設定した。動物を中心に展開するゾーンにおいては、動物と人、動物と植物との関わりが理解できるように、生息地別の展示ゾーンへと再配置することを基本とし、植物を中心に展開するゾーンにおいては、植物と人との関わりが理解できるように、人と植物の関係をテーマとした展示ゾーンに分けることを基本とした。

また、園内各所において、にぎわいのある快適な園内空間の創出を図るため、快適な飲食スペース、トイレ、休息スペース、授乳スペース等を充実するとともに、飲食・物販施設等も整備を進めることとした。

基本計画に基づく事業（平成19年度～平成21年度）

平成19年６月に策定された基本計画では、「平成28年度までに３期程度に分けて開園しながら整備」するとし、総事業費は約400～500億円程度と想定していた。獣舎の再整備は、動物を移動させながら進める必要があるため、当初は動物移動のための仮獣舎や、動物移動の必要のない植物園や動植物園外を中心に整備を進めた。

平成21年から基本計画の見直しに着手し、基本計画に基づく事業は継続事業を除き一旦

ゾーン計画図

立ち止まることになった。

※以降に記載する整備施設等は、オープンした順に掲載しており、一部で各期における事業展開と一致しないものがある。

○チンパンジータワー（平成20年11月オープン）

既存の類人猿舎のチンパンジーの運動場を改修し、専ら樹上で暮らすチンパンジーの動物福祉向上のための環境エンリッチメントとして、全体の高さ11.55mのチンパンジー用のタワーを設置したもので、再生プランに基づき整備した最初の施設である。

建設にあたっては、京都大学との連携協定に基づき、霊長類研究所、野生動物研究センターの協力を得て取り組んだ。

タワーの建設にあわせ、チンパンジーと来園者や飼育員・研究者との間で簡単なゲーム等でコミュニケーションを図るとともに、チンパンジーの知能の高さを間近で見ることができるコミュニケーションボックス「パンラボ」を新設した。

チンパンジータワー

なお、平成30年の新ゴリラ・チンパンジー舎のオープンに伴い、このチンパンジー舎は閉鎖したが、チンパンジータワーの一部は新しいチンパンジー舎に移設し、引き続き活用している。

○桜の回廊（平成21年３月オープン）

植物園の日本の植物と文化ゾーンに位置し、日本の園芸文化の根幹の一つである桜を日本全国から集め、その種の多様性を学ぶことができるようにするとともに、古来の景観を重視した里山のヤマザクラが咲く風景の創出を目指した。

さらに、名古屋に縁のある伊藤圭介が記述した「錦果草本図設・桜譜」にある品種も併せて導入し、近代の園芸とのつながりも展示している。（詳細は、「第1節 動植物園　２　植物園　2000年代（平成12年～21年）○桜の回廊供用開始」を参照）

○地域の自然学習林（平成21年４月オープン）

花と緑のふれあいゾーンに位置し、名古屋地域の自然植生の景観を再現し、昆虫のすみかとしての植生を創ることで、身近な生き物の採取や生態の観察を通して自然を知る体験学習の場を提供している。

地域の自然学習林

また、名古屋地域の絶滅が危惧される残すべき植物を保全し、栽培管理調査を通して、地域の自然の保全活動に役立てることを目指している。（詳細は、「第１節 動植物園　２　植物園　2000年代（平成12年～21年）○地域の自然学習林供用開始」を参照）

○東海モデル林（平成21年４月オープン）

日本の里ゾーンに位置しており、かつて木曽・裏木曽地域の尾張藩御用林で貴重な森林資源として保護・活用されてきた木曽五木等、東海地方ゆかりの植物を集めモデル林として展示しており、人と植物の関わりを学習できる場として整備した。

また、東海地域に飛来する渡りのチョウであるアサギマダラが集まるよう、チョウの食草（ガガイモ科植物）や蜜源植物（フジバカマ、ヒヨドリバナ等キク科植物）を植栽している。

東海モデル林

第一期事業（平成22年度～平成26年度）

平成22年５月に策定した新基本計画に基づき、これまでの東山動植物園の歴史を踏まえ、来園者に感動を与えるアジアゾーン（アジアゾウエリア）や、以前から整備を進めていたアメリカゾーン（北アメリカエリア）を中心に事業を展開した。

また、第二期にかけて、来園者の利便性や快適性の向上のため、洋式化が困難なトイレ等を中心にトイレの改築を重点的に進め、洋式化やバリアフリー化を推進したほか、新たな民設民営の飲食・物販施設を導入し、園内の魅力向上を図った。

○ゾウガメ舎運動場（平成22年４月オープン）

魚類、両生類・ハ虫類ゾーンの自然動物館に併設する形で整備した。希少種であるゾウガメの健康維持・繁殖を図るために、日光浴ができる運動場を併設している。運動場周囲の観覧通路を低くしており、ゾウガメの目の高さからゾウガメの動きや、ゾウに似ているといわれる足の形状、甲羅の模様等を観察できる。

また、運動場内に張り出したビューイングシェルターからも、ゾウガメをガラス越しで間近に観察できる。

ゾウガメ舎運動場

○ふれあいの森「東星ふれあい広場」（平成22年７月オープン）

東山公園最北部に位置し、以前は老人ホーム「清風荘」が設置されていたが、緑政土木局が用地を取得し、原っぱ（張芝）等の整備を行った。東山学区と星ケ丘学区の間に位置することから「東星ふれあい広場」と名づけられ、平成22年７月に供用し、その後も順次広場としての整備を進めてきた。

現在は一時的に都市公園を削除し、千種区役所・千種保健センターの建て替え中の仮設庁舎（令和５年１月開設）の敷地として使用されている。

東星ふれあい広場

○くらしの森（平成22年９月オープン）

なごや東山の森は都市に残された貴重な緑であり、特に「なごや東山の森づくり基本構想」において「くらしの森」と名づけられた平和公園南部は、起伏に富んだ地形や雑木林、湿地等の里山的な自然環境がよく残されてきた。

平成20年度から22年度にかけて造成及びため池・せせらぎ・水田・畑等の整備工事を行うとともに、調査の中で確認された鉛の土壌汚染区域（以前、射撃場として使用されていたエリア）の対策を行った。

なお、植樹や耕作、樹林の手入れ等については市民協働で取り組んでいる。

あわせて、森づくり活動の拠点施設「里山の家」を新築し、平成22年にオープンした。この里山の家では、本市の「緑のパートナー」である「特定非営利法人なごや東山の森づくりの会」が活動の拠点とするとともに、散策に訪れる方へのグリーンガイドツアーやクラフト制作等の活動を行っている。

里山の家

○アメリカバイソン舎（平成22年度10月オープン）【プレーリードッグ舎、カナダヤマアラシ舎併設】

アメリカゾーンの北アメリカエリアに位置し、北アメリカで一度は絶滅寸前まで追い込まれながらも、その後の積極的な保護策により絶滅の危機から救われたアメリカバイソンを、広々とした運動場で展示している。観覧通路からバイソンの迫力ある姿と息づかいを間近に感じることができる。

アメリカバイソン舎

○オオアリクイ・ヤブイヌ舎（平成24年４月リニューアルオープン）

アメリカゾーンの南アメリカエリアに位置している。アルパカ、トナカイの獣舎を改修して整備した。

オオアリクイ舎では、アリ塚で舌を上手に使ってエサを食べるオオアリクイの姿を近くで観察することができるよう、観覧園路のすぐ近くにアリ塚型のフィーダー（エサ置き場）を設置している。

ヤブイヌ舎では、運動場で家族仲良く駆け回ったり、水浴びをしたりする姿を観察することができるよう、プールや巣穴のある広い運動場を整備している。

オオアリクイ舎

○シンリンオオカミ舎（平成24年４月オープン）

アメリカゾーンの北アメリカエリアに位置し、野生と同じように群れで走り回るオオカミの姿を観察できるよう、樹木に覆われた広い運動場を整備した。

シンリンオオカミ舎

堀部分はプール越しに柵がない構造となっており、ガラス部分は顔と顔がつくほど近くでオオカミを見られるようになっている。さらに二重網部分ではオオカミの臭いや息づかいまで直接感じることができる施設となっている。

○ゾージアム（アジアゾウ舎）（平成25年９月オープン）【コツメカワウソ舎併設】

アジアゾーンのアジアゾウエリアに位置し、ゾージアムとは造語で、ゾウ・ミュージアムを略してゾージアムとした愛称である。

東山動植物園におけるアジアゾウは、来園者に人気があるとともに「ゾウ列車」等の歴史を持ち、動物園を語る上では外せないシンボル的な存在であることから、再生プランの第一弾の目玉事業として整備した。

アジアゾウのふるさとである「スリランカ」を感じられる雰囲気を演出し、広い運動場でアジアゾウが生き生きと生活する姿を間近に観察できることをコンセプトとしている。

屋外運動場は、スリランカの川をイメージしたプールや岩場を設置し、隣接する獣舎は、スリランカの伝統的な民家をイメージして、屋根はヤシの葉、柱・外壁等は木、壁は土壁のデザインを採用している。

ゾージアム

また、アジアゾウの展示を通して、ゾウ列車等、東山のアジアゾウの歴史やアジアゾウと人との関わり、スリランカの自然環境等を来園者に伝える環境教育の場を充実させており、屋内観覧展示コーナーでは、立体模型、映像、パネル等を使って紹介している。

展示コーナー

ゾージアムは、アジアゾウ舎としては建設当時日本最大級の広さを誇り、広々とした飼育スペースの中で、自然に近い環境を再現しアジアゾウを飼育している。環境エンリッチメントを充実させるため、屋外運動場には、砂遊びができる砂地、泥あそびができるぬた場、水浴びができるプール、穴や棚等、様々に食べ物を置く場所、強い日差しを避けられる日影等を整備している。

ゾウのような大型の動物は、通常使われる動物輸送箱による移動が困難であることから、ゾージアムは旧アジアゾウ舎に隣接する敷地に計画し、ゾウが新獣舎へ歩いて移動する通路を設置した。ゾウは知能の高い動物であり、最も警戒心が強い年長の個体は、その移動に約３か月半を要した。

ゾウの移動後、旧アジアゾウ舎は取り壊し、休憩所及び広場に再整備した。

○ハクトウワシ舎(平成26年４月オープン)
【アメリカビーバー舎、トナカイ舎併設】

アメリカゾーンの北アメリカエリアに位置し、アメリカビーバーが生息する川の上空をアメリカの国鳥であるハクトウワシが悠々と飛ぶ、北アメリカの風景を再現した施設である。樹上で羽休めをしたり、水辺で魚を捕まえたりするハクトウワシの様子を間近で観察することができる。

ハクトウワシ舎

また、獣舎の下部にアメリカビーバー舎を併設しており、その巣を断面で観察することが可能で､天敵の侵入を防ぐアメリカビーバーの巣造りの巧妙さを知ることができる。

ハクトウワシ舎の完成で、アメリカゾーンの北アメリカエリアの整備は完了した。一度は絶滅寸前まで追い込まれながらも、その後の積極的な保護策により絶滅の危機から救われた北アメリカ大陸の三大保護動物（アメリカバイソン、オオカミ、ハクトウワシ)を観察して楽しんでいただくとともに、保護活動の成功例として保護活動の必要性を知るきっかけとしている。

○ツシマヤマネコ舎(平成26年４月オープン)

日本ゾーンの日本産動物エリアに位置し、国の天然記念物に指定されている日本の固有種ツシマヤマネコの生態や、生息地である長崎県対馬の環境等を学びながら、観覧することができる施設である。３か所ある屋外運動場は、対馬の上島の風景を再現しており、対馬の里山から森の中に分け入っていくようなイメージとしている。

また、ツシマヤマネコ舎は、環境省による保護増殖計画に基づく繁殖施設としての役割も担っているため、バックヤードに非公開の運動場や多くの寝室を設けるなど、繁殖のための施設を充実させている。

ツシマヤマネコ舎

第二期事業（平成27年度～令和元年度）

第二期事業は、東山の資産を活かし知的好奇心や探究心を引き出すことを重点的なテーマとし、アフリカゾーン（アフリカの森エリア）の整備や、重要文化財温室前館の復原をはじめとする歴史文化的施設の保全・活用を中心に事業を展開した。

○中央休憩所（平成28年２月オープン）

動物園本園エリアの営業施設に隣接する園内最大の屋根付き休憩所で、公募により決定した第二期営業施設（フードコート）の整備事業者と調整しながら、営業施設にあわせて整備した。

約240席のテーブルベンチを配置し、高窓により明るさを確保した開放的な空間としている。

（営業施設の詳細は、「第１節 動植物園３　施設運営　企業等の参画　○第一期営業施設・第二期営業施設の整備」を参照）

中央休憩所

○恐竜像の補強・補修（平成29年４月工事完了）

動物園本園にある古代池とその周辺に、開園翌年の昭和13年に造られた３体のコンクリート製恐竜像（ブロントサウルス像、イグアノドン像、トリケラトプス像）がある。平成23年には「東山動物園恐竜像」として本市の認定地域建造物資産にも認定された歴史的価値のある構造物である。建設から長年経過し、腕に亀裂が入るなど劣化が進んでいたが、これまで抜本的な補修は行われていなかった。

新基本計画では歴史文化的資産の保全活用を図ることとしており、恐竜像も保全活用の取り組みを開始した。

類似の構造物の補修・補強の実績がなく対応に苦慮する中で、これまでも調査に協力していただいていた特定非営利活動法人コンクリート技術支援機構、公益社団法人日本コンクリート工学会中部支部、中部セメントコンクリート研究会の３団体と平成25年に連携協定を締結し、倒壊による被害が大きいと想定されたブロントサウルス像、イグアノドン像を対象に、調査・解析方式を検討しながら調査を開始した。

内部構造を確認する内視鏡調査や３Ｄレーザー計測による部材厚の確認等の様々な調査及び３次元解析の結果を踏まえて設計を行い、基礎の大型化や内外面の補強・補修を実施した。その際、今後のメンテナンスを考慮し、新たに点検口も設けた。

残るトリケラトプス像は２体の補強・補修後に洗浄や部分的な補修を実施した。もともとトリケラトプス像は古代池の中にあったが、古代池に鳥インフルエンザ対策のネットを設置する際に池を縮小し、現在のような陸上の姿となった。

補強・補修完了直後の恐竜像

なお、恐竜像の補強・補修にあわせて、ペリカン舎や周辺の広場の整備も行っている。

○ゴリラ･チンパンジー舎(平成30年９月オープン)

アフリカゾーンのアフリカの森エリアに位置し、再生プラン第二期事業の主要施設として、整備した。

東山の誇る豊かな森を背景に、群れで暮らす高い知能を持つゴリラ、チンパンジーがのびのびと暮らす姿を通して、「ヒトのなかま」について知ってもらうとともに、人と動物と環境の関係を考えるきっかけとなることを目的としている。

屋外運動場には、最高高さ８ｍのゴリラタワー、最高高さ15ｍのチンパンジータワー、それらをつなぐ橋やロープを設置し、森で暮らす動物たちが高所でのびのびと生活する様子を観察できるようにした。

敷地は高低差のある地形のため、それを生かして観覧通路を整備しており、動物たちを様々な角度から観察できる。

ゴリラ・チンパンジー舎

屋内運動場は、群れで暮らすゴリラ、チンパンジーがストレスなく過ごせるよう世界基準を踏まえた日本最大級の広さを確保するとともに、動物たちの生活環境向上を図るタワーや給餌装置等を整備し、動物福祉に配慮した環境を整えている。

屋内運動場

屋内観覧通路は、動物たちをガラス越しに間近に観察できるだけではなく、映像装置やモニュメント等で動物たちの生態やその生息環境を楽しみながら学ぶことができる施設となっている。

展示コーナーのモニュメント

レッサーパンダ舎

なお、新基本計画において、アフリカゾーンはサバンナエリアから整備する予定であったが、大型動物の移動の困難さ等を踏まえ、整備予定地を入れ替えた上でアフリカの森エリアから整備を進めた。

第三期事業（令和２年度～令和６年度）

第三期事業は、何度も訪れたくなるような多様な魅力を持つ動植物園に向けて、ハード・ソフト両面から取り組んでいくことを重点テーマとし、第二期からの継続事業である重要文化財温室前館の復原及び洋風庭園、アジアゾーン（アジアの高地エリア・熱帯雨林エリア）、アメリカゾーン（南アメリカエリア）を中心に事業を展開している。

○レッサーパンダ舎（令和３年３月オープン）

アジアゾーンのアジアの高地エリアに位置し、敷地の高低差を活かして、レッサーパンダが樹上生活を楽しむ姿や野生に近い動き等を様々な角度から観察できる施設である。

レッサーパンダ舎は、市内にお住まいであった方の「子どもたちの喜ぶものに役立てて欲しい」という趣旨のご遺志で約１億７千万円の寄附のお申し出をいただいたことをきっかけに整備を開始した。

屋外では、空中通路により屋内と屋外運動場を行き来するレッサーパンダを見上げて観察することができる。屋内運動場も、立体的な動きが観察できるよう、レッサーパンダが自在に登り降りできる遊具を設置した。

また、屋内観覧通路はガラスへの映り込みが少なくなるようガラスに傾斜をつけたり、照明の設置位置等を工夫したりしている。

屋外運動場をつなぐ空中通路

なお、敷地に周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、整備着手前に発掘調査を実施し、古窯の存在が確認された。埋蔵文化財の記録保存を実施した後、整備工事に着手した。

○重要文化財「名古屋市東山植物園温室前館」及び洋風庭園（令和３年４月リニューアルオープン）

世界の植物と文化ゾーンに位置する温室前館は、昭和12年の植物園開園当初から公開している、現存する日本最古の公共温室である。国内最初期の本格的な鉄骨造温室建築として重要であり、鉄とガラスによる建築物の造形的特質を良く示している貴重な施設で、初期の全溶接建築物として建築技術史上価値が高いものとして評価され、平成18年12月に国の重要文化財に指定された。

しかしながら、建設より約80年が経過し、一部の部材の老朽化が著しく、また耐震診断により耐震補強工事も必要と判定されたことから、大規模な補修・修繕を実施し、開園当時の姿に復原した。

重要文化財温室前館及び洋風庭園

復原にあたっては、平成22年から有識者も加えた「重要文化財名古屋市東山植物園温室前館の保存及び活用に関する検討委員会」を設置し、保存修理工事完了まで計20回の委員会を開催し、保存活用に向けた検討を重ねた。重要文化財であることから、設計及び施工監理は文化庁の外郭団体である公益財団法人文化財建造物保存技術協会に委託して実施した。

なお、復原工事にあたっては、温室内の植物を移植する必要があるため、平成25年度にバックヤードに保管温室を整備し、植物の移植を行ったほか、温室内にある岩組も形状を正確に記録した上で取り外し、温室前館の保存修理工事完了後に復原した。

また、温室前館の前庭となる洋風庭園は、鏡池を中心にした幾何学式デザインを採用し、温室前館と一体となった美しい景観が広がり、ここでしか味わえない、ゆったりとした特別な時間を過ごせる空間とした。

洋風庭園の整備にあたっては、有識者を加えた「洋風庭園のあり方懇談会」を平成23年度から24年度にかけて計４回開催し、整備方針を決定した。

○動物病院改築（令和４年12月完成）

旧動物病院の施設老朽化に加え、病原性鳥インフルエンザ等感染症へ対応するために、感染症に罹患した動物の隔離機能や、感染症を早期に診断する高度医療機器（CT、遺伝子検査機器、伝染病診断機器等）を導入し、感染動物を取り扱う際の消毒に対応できる施設を整備した。

重要文化財温室前館内部

整備以外の取り組みについて

再生プランは、ハード整備だけでなく、ソフト事業の展開や企業参画の推進等、多様な取り組みを進めている。

概要を下記の項目で記載する。

〇東山再生フォーラム

東山動植物園再生プランについて、有識者や事業者の方々から意見をいただくとともに市民とともに考え、理解を深めていただくことを目的として、平成21年度から「東山再生フォーラム」を開催しており、令和４年度までに、特別企画を含め計38回開催している。

再生フォーラム開催状況

年度	取り組みの内容
H21	第１回　人と自然をつなぐ懸け橋へ 第２回　交流と賑わいの創出 第３回　動植物園の役割と東山再生のあり方
H22	第４回　生物多様性を考える 第５回　COP10から東山へ 第６回　星が丘門エントランスの活性化に向けて 特別企画　動物とのふれあいについて考える 第７回　東山動植物園における新たな活用に向けて
H23	第８回　東山動植物園への学術からの期待 第９回　再生本格始動ゾウ列車から再生へ 第10回　再生本格始動　歴史と命につつまれて 第11回　くらしの森に集う 第12回　みんなで東山の再生を推進しよう　企業の視点から
H24	第13回　歴史をつなごう夢をつなごう 第14回　アジアゾウのふるさと「スリランカ」 第15回　魅力ある東山植物園に向けて 第16回　東山動植物園の近況
H25	第17回　重要文化財温室の歴史と植物たち 特別企画　伊藤圭介生誕210年記念展―東山に眠る本草学の宝― 第18回　松沢哲郎氏　文化功労者顕彰記念講演
H26	第19回　行ってみたい、また来たい東山動植物園へ 第20回　生き物について学ぶ　わたしたちの東山動植物園へ(台風のため中止) 第21回　日本一、そして世界一 愛される東山動植物園へ
H27	第22回　東山動植物園の歴史を知り、明日へつなぐ 第23回　植物園の新たな取り組み 第24回　～生き物と東山動植物園～
H28	第25回　ゴリラ・チンパンジーの新たな展示に向けて～ヒトのなかまがくらす森～ 第26回　未来に引き継ぐ　重要文化財温室
H29	第27回　地域の動植物を守る～生息域外保全の役割について～ 第28回　動物園の魅力向上と“生”への気付き-動物園デザインと動物のより良い暮らし
H30	第29回　「名古屋市と京都大学との連携に関する協定」締結１０周年記念特別講演会 第30回　市民とつくる桜の回廊について
R1	第31回　オランウータンってどんな『ヒト』？ 第32回　多様な魅力を持つ植物園へのチャレンジ(新型コロナウイルス感染症拡大により中止)
R2	第33回　絶滅危惧種　スマトラトラ　～スマトラトラを知る～
R3	第34回　東山植物園の魅力
R4	第35回　東山動植物園での種の保存の取り組み
	第36回　牧野富太郎と伊藤圭介

○企業等の参画

企業から東山動植物園の企画や運営等に広く参画してもらうため、新基本計画の素案に基づき、平成22年１月から寄附、イベントへの協賛、バナーやマップ広告等、企業参画の募集を開始した。

現在は、寄附等の各種支援制度の創設、民間活力を活用した営業施設の導入、公式ロゴ・シンボルマークやマスコットキャラクターによるブランド戦略事業の展開、広報パートナー協定の締結と事業展開(後述)、といった各種の取り組みを行っている。

企業・法人だけでなく、来園者からの募金や市民等からの寄附を受け入れる事業・制度についても､｢名古屋市東山動植物園基金｣(通称:東山動植物園いのちつなぐ基金)（令和２年３月創設)をはじめとして各種取り組んでいる。

（詳細は「第１節 動植物園　３　施設・運営　企業等の参画」参照）

この他にも、植物園のお花畑において、企業・団体との協働による花壇づくり「花いっぱいプロジェクト」を展開している。これは、再生プランの一環として、また、平成22年10月に開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10)を記念した関連行事として、地元企業や市民、学生等の皆さんとの協働によって立ち上げた事業で､その後､参加企業･団体で苗等の資材提供、花苗の生長状況の確認や花壇周辺の清掃等の花壇管理までを負担していただく形となって継続してきた。

令和３年度からお花畑再生整備事業により一時中断したが、再整備後に再開を予定している。

○環境教育

再生プランでは、動植物園の４つの役割として「動植物を見て楽しむ」｢楽しみながら学ぶ｣｢野生生物を守る｣｢調査研究を行う」を掲げており、このうちの｢楽しみながら学ぶ｣の取り組みとして、環境教育を積極的に展開している。

こうした中、東山動植物園では学校をはじめとする教育団体等を対象とした環境教育プログラム（詳細は｢第１節 動植物園　１ 動物園｣参照)や、飼育員による解説に取り組んできた。これらに加え、令和３年度から環境教育解説員による動物園レクチャーツアーを開始し、環境教育の強化を図っている。

○調査研究、種の保存

動植物園の４つの役割のうちの「野生生物を守る｣｢調査研究を行う」についても、動物園では新種のメダカ科魚類の発見・累代飼育やオワリサンショウウオの新種報告等、植物園では伊藤圭介の日記の解読研究等の事業に鋭意取り組んでいる。(動物園、植物園の項も参照)

○情報発信

より多くの来園者に東山動植物園を楽しんでいただくため、情報提供サービスの充実にも取り組んでいる。

一例として二次元バーコードを活用した情報発信サービスがあり、獣舎等の施設に設置してある二次元バーコードをスマートフォン等で読み取ることで、５か国語による解説を見ることができ、また音声による解説も聞くことができるサービスを実施している。令和２年度から導入し、毎年、対象とする獣舎等の拡充を図るなど､継続的に取り組んでいる。

このほか、SNS等での動植物等の情報発信、無料Wi-Fiの園内提供（令和元年度～)、スマホ等での園内ルート検索サービスの提供

（令和３年度～）、といった情報提供サービスを展開している。

二次元バーコードを活用した情報発信

また、東山動植物園はブラザー工業株式会社と、令和３年６月、「東山動植物園広報パートナー協定」を締結した。この協定は、東山動植物園が推進する種の保存や環境教育等に係る普及啓発の取り組みについて協力及び連携を図り、広く情報発信することを目的としており、協定に基づいて、絶滅危惧種ポスターの作成をはじめ、新聞広告等、環境教育等の普及啓発についてブラザー工業に協力いただき、情報発信を行っている。

新聞広告

コラム

東山動植物園の再生整備での苦労話

動植物園の再生の仕事は、これまで主に経験してきた道路の仕事とは異なる点が多く、獣舎の整備にあたっては、獣医師や飼育員、受注者などと打合せを重ねて様々な仕様などを決めていきますが、最初は知らない言葉も多く、わからないことだらけで大変でした。その後も参考事例があまりない事業に携わることがあり、設計や工事で苦労しましたが、私が携わった事業での苦労話を少しご紹介します。

１つ目は、ゴリラ・チンパンジー舎です。この敷地は高低差が５ｍ程度ある傾斜地で、様々な視点から動物を観察できるメリットはありますが、バリアフリー化を図るため観覧通路の高さに制約がありました。観覧通路と飼育管理に使用するバックヤードとの高低差も大きく、また動物福祉の向上のため、できるだけ動物が使える屋内展示室や運動場の面積を広くしてほしいという要望もありました。これらを解決するため、管理用施設や動物の寝室は屋内展示室や観覧通路の下の階に設置しました。動物はシュートと呼ばれる通路状の檻を通って各室間を移動しますが、屋内展示室とは梯子を用いて垂直につながる珍しい形式となっています。

また、ゴリラやチンパンジーは知能や身体能力が非常に高いので、脱走する危険性が高い動物です。ジャンプ力が高く、モートと呼ばれる堀を使った展示では、適切な距離の確保や助走をつけてジャンプしにくい工夫をしています。また、指の第一関節が凹凸にかかれば垂直の壁を登れるほど握力も強いので、運動場に面した壁などは平滑に仕上げる必要があるほか、壁の折れ点でも腕を突っ張りながら登る可能性があるため、その角度は135度以上にしています。その他にもボルトやサッシのコーキングなども外してしまう可能性があり、ロックボルトやコーキングのカバーなど様々な工夫の必要性があるなど、非常に多岐に渡る工夫が必要な獣舎でした。

２つ目は、コンクリート製恐竜像の補強・補修です。昭和12年当時の設計図があったものの、実際に内部がどうなっているのかわからない状況から調査を開始しました。名古屋工業大学の河辺伸二教授を委員長とする恐竜像の保存に情熱を持った「東山動植物園恐竜像調査保存委員会」の皆様のご協力により、保存のための様々な調査や解析を行っていただきました。

調査・解析から様々なことが判明しましたが、その結果を踏まえ、どういった補強・補修をどのような方法で行うかは、同様の構造物の補強・補修事例がないため、実施設計を受注したコンサルタントの担当者と、コンクリート補修の専門業者の担当者の意見を踏まえ議論しながら設計を進めました。

実際の補修工事において大変だったのは、ブロントサウルスの首やイグアノドンの腕など作業員の手が届かない部分の補修です。難しい課題でしたが、施工業者の提案により、ブロントサウルスの首はあらかじめ頭頂部に穴を空け、作業員を上下に配置して棒に取り付けたノズルを用いて補修用モルタルの吹き付けができました。また、イグアノドンの腕はもともと内部から補修用モルタルを吹き付ける予定でしたが、鉄骨が入り組んでおり施工が難しいため、一度腕を体から切り離し、内部を補修してから元に戻して接着し連結する方法としました。一度切り離してしまうと再度取り付けるのが難しいのではないかと心配しておりましたが、優れた技能を持った作業員の皆様のおかげでほぼ元通りになり、腕を支える丸太の松葉づえが不要な建設当時の姿に復元することができました。

コラム

東山動植物園再生プランに携わった話

建築技師として住宅都市局に採用され、計画系の仕事に携わってまいりました。その中で幼き頃より足を運んだ、「東山動植物園」での再生プランに携わりたく思っていたところ、めぐり合わせ良く、再生整備課に配属させていただくことになりました。今まで従事してきた職務とは、内容も職場環境も大きく違い、計画を立てるにあたっての内部調整だけでも、集客施設の運営を行う業務担当に管理担当、動物を扱い展示する動物園の飼育担当、動物の健康管理を行う動物病院、植物を管理する植物園の造園担当、園の運営を担う東山公園協会と、多岐にわたる部署と多様な専門性の高い内容の協議調整が必要で、計画の意思決定をするために多くの時間がかかりました。そんな中で経験した、おもしろくも大変だった２つの案件についてお話しいたします。

～アジアゾウ獣舎「ゾージアム」～

自然界同様、メスと子どもから成る群れでの生活を展示できるよう寝室運動場を広くし、様々なエンリッチメントを整え動物の健康を考えた獣舎です。獣舎の計画で、今まで経験してきた計画設計と大きく違うのは、住人が動物だということです。動物といっても大きさや生態など様々なため、獣舎のプラン、仕様などは動物種によって注意しなければいけない点が異なります。例えば、アジアゾウの鼻が来園者に届いてはいけませんが、遠すぎて観察できないようでもよくありません。飼育職員や獣医師が健康管理をしやすくしないといけませんが、危険が及ばないようにしないといけません。また、動物にとっては、生涯健康に暮らせるよう、温度管理やストレス発散の場などが必要になります。各専門家の意見を聴きつつ、こういったことを考え計画を立て整備します。

ゾージアムには、獣舎と隣接した開放的な環境教育施設があります。当時設計も完了し、展示の整備を進める中で、アジアゾウの赤ちゃんが生まれることがわかりました。「さくら」です。妊娠中であることや想定出産時期などはわかっていましたが、東山では初のアジアゾウの出産であり、国内での事例も少なく、何が起こるか分かりません。特に知能の高いゾウは、環境の変化や飼育係員の緊張などがあると、いわゆる空気を読み、その影響を受けるため、精神的にも不安定になると聞きました。出産間近には、動物園による24時間監視体制がしかれ、人も動物もピリピリしている時期が短からずありました。もちろん貴重なアジアゾウとその出産には、最優先で最大の配慮をしなければなりませんが、私たちは、そういった中でも再生事業を進めていかなくてはならず、その時期に行った動物園関係者との協議は、取れる時間を最優先し、夜中までの打合せが何度も続き、動物の状態によっては打合せ中止などもしばしばありました。また、整備工事もアジアゾウの状態変化に配慮し、作業中止となることもありました。幸い当時のアジアゾウ担当飼育係員の方たちが、大変忙しい中でも、非常に協力的で助けられたことには、今でも感謝しています。

そういった中で、アジアゾウが無事出産し、母子ともに健康で、かわいい赤ちゃんゾウに触れたときには、物凄く嬉しいと同時に大いにほっとしました。もちろん赤ちゃんが誕生したあとも、整備工事の刺激で育児放棄しない様になど、厳戒体制はしばらく続きました。併せて概ね設計が完了していた環境教育展示の内容に、貴重な事例であるアジアゾウの出産や赤ちゃんの成長を盛り込むことになり、新たなパネルや映像

を作成するために、調査や材料集めを再び行うなど、新獣舎が完成し、動物が落ち着いてオープンできるようになるまで、まだまだ時間はかかりました。

～国指定重要文化財「名古屋市東山植物園温室前館」～

昭和12年の開園当初から現在まで活用されてきた植物園温室前館。この保存修理事業にもいろいろなことがありました。温室前館は、平成18年に国の重要文化財に指定されるまでに、空襲や伊勢湾台風による破損補修、水生植物や熱帯魚を飼育していたシダ室の用途変更、スチールサッシからアルミサッシへの改修、石炭から重油、温水への熱源の変更など、建築当初から管理上の必要性や来園者の利便性に応じて改修を重ねていました。そのため鉄骨トラスなど主要構造部以外の当初部材の多くは失われていました。また、温室は湿気が多く、主要構造部も錆による劣化がかなり進んでいました。そういったことから、どういった復原とするのか方向性を定めるのに、頭を悩ませました。

復原にあたり、当時の姿がわかる資料が必要になります。そこで①園内外各所に保存されている資料捜索、②当時関わった人やその子孫関係者にヒアリング、③市民からの情報提供、この３つの方法で図面、写真、文献、記録などの資料を集めました。こうして発見された当初設計の原図の一部や青焼き図面により、詳細な仕様がわかり、図面だけでは再現できないような部分については、市民から提供された「古写真」が重要な資料になりました。こうして集まった膨大な資料の整理分析には多くの時間を要しました。

また、保存修理工事を進めていく中で思わぬことも多々ありました。例えば、撤去していた植栽ますの土や取り外していた岩組の岩の間の砂の中から、建設当初と思われる錆止め塗料のついた屋根のガラス、温室内の床タイル、ガラス窓の開閉装置の部品など、現存すると思っていなかった貴重な遺物が発掘されたのです。これらは、これまで古写真などでしか確認できていないものも多く、現物が発見されたことにより、より正確に当時の姿を復原するのに大変役立つと同時に、これまでの仮説が覆って方針変更したものもありました。そういった貴重な遺物を見逃さないよう、慎重に解体撤去を進める必要があり、ここにも相当な時間を要しました。また、工事監理者や施工業者だけではなく、私たちも何度も足を運んで、目を皿のようにして遺物を探したことを懐かしく思い出します。

中央ヤシ室内の岩組については、重要文化財ではないのですが、ヤシ室の空間に重要な要素であり文化財相当とするとして、本体主要構造部の保存修理後、復原することになりました。この岩組は、当初設計では躯体に結束するようになっていましたが、いざ取り外してみると、ただ岩が積んであるだけでした。当時の高い技能によって、80年以上、その姿を保っていたのです。復原にあたり耐震性の確保が課題となり、岩を固定することが求められましたが、重要文化財である温室の躯体に、結束することや岩と構造物の荷重をかけることは認められませんでした。そこで、方法を検討し、建物から分離した自立型の擁壁で岩組みを支えることとしました。建物から10cm程度しか離れていない擁壁をつくるため、建築物で使用するそのまま埋め戻せる「ラス型枠」を使用するなど、方法を工夫し、なんとか当初の雰囲気を再現した岩組として復原できました。

こうして、微力ながら携わることができ、実現した再生事業が、末永く、来園者に対する特別なおもてなしになるよう願います。

第２節　平和公園

１　墓地移転事業

第二次世界大戦後の混乱した状況の中で市民の復興への意欲は強く、市内の復旧が急速に始められた。

しかし、無秩序に建てられる建物は将来の本市の発展に大きな障害となるおそれがあり、戦災復興計画を作成することが急務であった。国においては、昭和20年12月の閣議決定で「戦災地復興計画基本方針」が示された。本市では、戦災を受けた名古屋市中心部約 1,333万坪（4,406.6ha）について、都市計画愛知県地方委員会の議決を経て昭和21年６月27日、復興都市計画土地区画整理区域の決定をみた。

これを受け、本市では同年８月７日、都市計画事業を告示し、名古屋復興都市計画土地区画整理事業の着手となった。

この事業の大きな特色の一つは、施行地区内の279ケ所の墓地約18ha、墓碑数約 189,000基を集中移転したところである。しかし計画当初、墓碑の移転は宗教上の因習や感情に大きく支配されるものであるため、極めて困難な作業となった。そこで昭和21年６月17日、関係する仏教各派から16人の代表者が選出され、名古屋市復興墓地整理委員会が結成され、選出された各派の委員の協力により基本的に各寺の合意が得られた。昭和22年２月、東山に隣接する丘陵地帯（千種区田代町字鹿子殿地内）115.7haを新たに施行地区内に編入するとともに、同年５月６日にはこの地を墓地と公園とが一体化した墓苑（第一号東墓苑）とする都市計画決定がなされ、ここに平和公園が生まれた。

平和公園は、十分な緑地を配置するなど修景には特に配慮し、その趣旨は従来の墓碑の集積地の感がある墓地を閑寂清浄なものとし、墓参者はもとより市民の憩いの場にすることにあった。このため墓碑は原則として一家一基に整理統合し、墓地移転も昭和32年11月にはおおむね完了した。土地区画整理事業も昭和56年７月28日換地処分を行い、事業の結束をみた。

この墓地移転跡地は復興事業促進に大きな役割を果たし、現在の中心市街地の発展の基となった。当時の平和公園には新しい墓碑も増え、春秋の彼岸頃ともなると大変なにぎわいをみせていた。

なお、名古屋市戦災復興墓地整理委員会は墓地移転がほぼ完了した昭和38年11月発展的に解散し、新しく発足した名古屋市平和公園会に引き継がれ、事務局は当時の東山総合公園事務局に置かれている。

２　都市計画墓園第１号東墓苑について

墓地の集中移転地となった千種区田代町字鹿子殿は、当時市域の東のはずれに位置していた。この一体は灌木に覆われたなだらかな起伏のある丘陵地帯で、北に飛騨、木曽の山々を控え、南に伊勢湾を遠望する名勝の地であった。この丘陵地帯114.05haが、昭和22年５月６日、都市計画墓園第１号東墓苑として都市計画決定された。昭和32年３月23日、猪高町編入に伴う区域追加（ 129.9ha）、昭和32年９月24日、区域の実測及び都市計画街路の地積削減による誤謬訂正（148.18ha）、昭和33年12月13日、県立東山高校敷として一部区域の削減（146.53ha）を経て、現在に至っている。都市計画道路猫ヶ洞藤森線の北部地域については、主として墓地移転用地として計画され、戦災復興事業により整備が進められ、この公共空地及び街路築造整備も昭和33年に

は一応の完成をみた。

一方、南部地区も戦災復興事業として種々の施設整備が計画されていたが、復興土地区画整理事業の施行上の関係から昭和44年５月14日、南部地区37.8haが復興区域から除外されたため、当初計画された施設の整備は実現しなかった。このため南部地区50.1ha（一部戦災復興地区を含む）について、昭和48年10月５日、名古屋都市計画墓園事業第１号東墓苑として事業認可を受け、施設整備を行うことになった。北部地区の墓地区域に対し、南部地区は自然に恵まれた緑ゆたかな憩いの場として墓参りの人はもちろん市民の利用に供する施設計画が策定された。事業着手以来、民有地の取得、良好な自然環境を保持しながらの整備を実施しているが、一部耕作権の問題もあり、事業年度を延長し、整備を行った。これは当時、南部地区（現在の「くらしの森」）の中に団体が管理する耕作地と戦前から耕作を続けている方の耕作地があり、団体からは平成９年３月に本市に土地が返還されたが、個人の耕作者については、土地の明け渡しに応じなかったためである。その後、平成15年11月の訴訟で国と本市の主張が認められた結果、順次明け渡しが行われ、現在の形で整備が行われることとなった。

３　市民協働の歴史

平和公園南部地区は、昭和54年に昭和63年開催予定のオリンピックスタジアムの建設候補地として検討されたが、森林の開発に反対を唱えた市民が平和公園の自然調査活動を目的とした「平和公園自然観察会」を立ち上げた。

また、東山公園にも「東山自然観察会」が発足した。

その後も平和公園自然観察会、東山自然観察会は活動を続け、平成11年には市民、学識経験者、企業等の参画により、平和公園・東山公園の自然や活動に関する調査が行われ、その実績を踏まえて平成12年に市民・企業・行政の協働を目指した「なごや東山の森づくり研究活動会」が発足し、今後のあり方が検討された。同時期には平和公園愛護会と東山南部愛護会が発足した。その後、平成13年には「なごや東山の森づくり協議会」が発足し、なごや東山の森づくりの基本構想（案）を策定した。

上記のような様々な議論や現地調査・活動を経て平成15年に「なごや東山の森づくり基本構想」が策定・公表された。平成16年２月には平和公園愛護会と東山公園南部愛護会の流れを組んだ任意団体「なごや東山の森づくりの会」が発足した。平成18年からは本市と協定を結び、緑のパートナーとして活動を続けている。

平成17年、現地での活動拠点として仮設での「里山の家」がオープン。その後、平成22年に、本格的な活動拠点として、新築・再オープンした。

平成26年12月、これまで「なごや東山の森づくりの会」はNPO（特定非営利）法人化にむけて検討を続けていたが、検討を終え、認可申請を行った。平成27年４月４日、申請が認められ、任意団体から特定非営利法人として、継承・発足した。

この「NPO（特定非営利）法人なごや東山の森づくりの会」は、平和公園と東山公園を合わせた約400haの「なごや東山の森」内で、次世代に森の大切さと素晴らしさを伝えることを目的に、樹林地の手入れ、湿地の再生、観察・調査等の活動を行っている。

また、班活動も盛んで、平和公園のくらし

の森では、本市との協働で田んぼ班による稲作講座や、畑班による畑作講座等の里山体験講座が行われており、市民への森づくり活動の普及啓発活動も行っている。さらに、里山の家を拠点に、散策に訪れる方へのグリーンガイドツアーやクラフト制作等の活動も行っている。

４　平和公園の施設

平和堂

第二次世界大戦による尊い犠牲者の霊を慰めるとともに、永久平和を祈念する趣旨で愛知県、名古屋市、財界、仏教会が中心となって、平和を願う市民の寄附金をもって平和堂を建設しようと、昭和29年名古屋平和堂建設会が発足し、建設事業が進められた。

しかし、伊勢湾台風の被害により募金が集まらず、また建設費が高騰するなど、早期完成の見通しが困難になった。このため、平和堂建設会は、昭和36年本市に対し平和堂建設の寄附採納願書を提出した。

本市は、この機会に平和堂を戦災復興事業の記念施設として完成することにした。そして、壁面テラカッタの焼成、外観及び内部仕上げ工事を施し、昭和39年、77,226,000円をもって全事業を完了した。

平成27年度に耐震診断調査及び耐震対策調査を行った結果、現行耐震基準の性能は満たさないため、平成29年度、１階南側の柱に壁を設置する耐震工事を行った。

その後、平成30年度に外壁の一部が破損し落下するなどしたため、屋根や屋根の先頭部の重量軽減策が住宅都市局より提言され、意匠・材質についても検討が行われた。

このようなことから、令和２年度にこれらを考慮した外観の改修工事の検討委託を住宅都市局により行い、令和３年度、外壁のテラカッタの崩落・浮き等の補修や軒裏・軒先のひび割れの補修や避雷針の軽量化等の屋根の修繕、室内の壁面の塗装の劣化や剥離等の修繕を行った。

この工事に際しては、安置されている千手観音像の閉眼・開眼供養を平和公園墓地管理者会により執り行っている。

また令和４年度には、内部の電気設備の改修工事を行い、既設計器盤や電灯分電盤の修繕、屋内照明のLED化を行った。

緑の屋根は空を支えて希望を表し、支柱と軒下の赤は真心、壁面立像の黄は豊穣を表している。

小壁面は爆撃、煩悩、戦跡、戦後を示し、戦いの空しさを訴え、大壁面は生命讃、聖戦士を示し、情熱・献身による生きる喜びを表している。

立像は、浄美、意志、母性、英知をもって清浄、努力奉仕、自覚を示し、その根源である若さを表している。

なお、建物内部には中国より贈られた千手観音像が置かれている。

平和堂

無縁塚

新しい墓地の環境を保持するため、墓碑移転は原則として一家一基に整理統合された。整理された碑は無縁墓碑とともに一か

所に集められた無縁塚が建設された（敷地約2,000m^2、直径約15mの土まんじゅう）。移転前の碑数は 187,405基で、整理された碑数は122,472基である。

無縁塚

伊勢湾台風殉難者慰霊碑

昭和34年９月26日夜半、名古屋地方一帯は超大型の第15号台風に襲われ、全市にわたって多大な被害を受けた。この台風は後に伊勢湾台風とよばれ、特に南部では、想像を絶する高潮と流木の惨禍によって、河川、海岸の堤防が寸断され一夜にして濁水の海と化し、市民 1,851人の尊い命を失うに至った。

これらの人々の霊を祭るため、その一周年を期して昭和35年９月26日、平和堂西北の高台に「伊勢湾台風殉難者慰霊之碑」が建立され、内部には殉難者名簿が安置されている。

なお、毎年同日に市長らが出席する慰霊祭が行われている。

伊勢湾台風殉難者慰霊碑

静黙碑

昭和36年逝去した故第16代小林市長の偉徳をしのび職員一同の寄附により建立された。

碑の文字「静黙」は、故小林市長の自筆によるもので、生前自訓として常に座右におかれていたものである。

「伊勢湾台風殉難者慰霊碑」の慰霊祭と同日に「静黙碑」においても慰霊が行われている。

静黙碑

猫ヶ洞池

山崎川の源頭水源地で、約6.6ha面積を有する。この池の周辺では市内でもその数が減ってきている野鳥が観察できる。年間を通して50種以上が確認され、特に冬期のカモの飛来は数百羽にも達して付近は水鳥公園のような雰囲気をもち、野鳥の保護区にもなっている。

昭和54年には、山崎川導水事業に関連して護岸整備が行われ、この護岸を利用して魚釣りができるようになった。

平成20年度日本野鳥の会の呼びかけで、なごや東山森づくりの会、公園愛護会と共に、協働により清掃活動を実施した。以来、ほぼ毎年のようにボランティアによる清掃活動が実施されている。

猫ヶ洞池

桜の園

昭和47年に名古屋放送株式会社の開局10周年の記念事業の一つとして平和公園事務所周辺の約2.4haに約1,100本の桜を植樹し、「桜の園」として本市に寄贈されたものである。その後も昭和51年オオムラサキツツジ約4,000株、55年ヒラドツツジ等、約2,300株、56年シダレザクラ35本、57年ソメイヨシノ等、約70本、そして昭和59年にはヒカンザクラ等、50本とベンチ10基、合わせて上中木約1,400本、下木約6,700株を桜の園一帯に植樹したもので、桜の名所として市民に親しまれている。

桜の園

メタセコイア広場

猫ヶ洞池の東側に芝生広場を中心とした約２haに昭和53・54年にわたり、名古屋放送株式会社のグリーン・キャンペーン事業としてメタセコイア広場を造成し、メタセコイア44本を中心として、上木約150本、下木約2,200株を植樹し、本市へ寄贈されたもので、市民の憩いの広場となっている。

また、周辺には現在ヘリポートとして使用可能な広場が整備されており、芝生広場と合わせ休日には多くの市民に利用されている。

メタセコイア広場

ユーカリの森と温室

昭和55年９月、名古屋市はオーストラリアのシドニー市と姉妹都市提携を結び、昭和56年本山市長がシドニー市を親善訪問した際に、シドニー市長よりユーカリの種子が贈呈された。同年秋、平和公園１haに 2,500本植栽したのが始まりで、以後、57年に２ha、5,000本、58年に１ha、2,500本、合わせて４ha、19種10,000本が植栽された。

このユーカリは、昭和59年10月25日オーストラリアから東山動植物園へ贈られたコアラの主食として利用されている。

ユーカリは成長が早いが、台風等の風害を受けやすく、またシドニー市に比べ名古屋市の厳しい冬の寒さのため、コアラの餌となる新芽を確保することが困難となる。そこで台風及び寒さによるユーカリの全滅を避けるた

め、名古屋市より温暖な静岡県引佐町や豊橋市に昭和58～59年の２か年に20,000本のユーカリを分散植栽した。昭和59年３月には、ユーカリ栽培技術の習得のためオーストラリア、アメリカのロサンゼルス・サンディエゴに２名の技師が、また同年10月には、オーストラリアに技師１名が派遣された。これらをもとに、台風等の強風による倒木を避け、新芽を多く栽取する栽培方法として桑の木の栽培方法を採用した。

さらに、冬場の餌の確保のため、昭和59年秋には、温室（鉄骨ビニール張り）６棟、約3,600m^{2}を建設し、11種約1,000本のユーカリを栽培している。この温室の熱源は新しく開発された太陽熱利用の蓄熱機（蓄熱材　硫酸ナトリウムを主原料としたもの）がとり入れられた画期的な温室である。

ユーカリの森

やすらぎの園

平和堂の西に位置し、無縁塚と静黙碑にはさまれた面積約１haの憩いの広場として、昭和57年３月に整備された。

休憩所、便所、日本庭園が設けられ、萩のトンネル等もあって、当時は毎年９月のお彼岸に名古屋市平和公園会等の主催による「平和公園まつり」の会場としても利用されていた。

この「やすらぎの園」の碑名は名古屋市平和公園会の当時の会長、高間宗道氏の筆によるものである。

その後、平成10年度に都市整備事業として、「やすらぎの園」の再整備工事が行なわれ、平成11年３月、日本庭園・萩のトンネルに代わり、モニュメントとして「虹の塔」が整備された。

この「虹の塔」は21世紀を迎える名古屋をイメージして、高さ21mで作られており、毎年春分の日と秋分の日の正午頃には、頂上部に設けられたプリズムを通し、塔の窓からの光が床に虹を落とす仕掛けになっている。

やすらぎの園

献体の塔

平和公園北部の小高い丘の上に、極めてユニークな石の球体がある。これは医学の進歩発展のために自らの遺体を捧げ、角膜を提供して、視力障害や難病から人々を救うという尊い心で貢献された方々を永く顕彰するなどを目的として財団法人不老会（理事長久野庄太郎）が中心となって建立したものである。

この塔は、不老会が昭和52年頃から献体者を顕彰するための記念碑づくりを準備し、募金活動によって集めた資金約４億円で、昭和59年５月11日に着工し、昭和60年４月11日竣工したものである。

現在、献体の塔は公益財団法人不老会が公園施設管理許可を受け、納室内部109.664m^{2}の管理を行っており、例年５月中旬に「献体者顕彰式並びに御名札納め式」を行っている。

「献体の塔」は、献体運動を更に広め、世界人類の幸せに役立てることを祈念して、太陽、地球、月を形どり、無窮の意味をもつ球体の塔にしたという。直径９ｍの球体は、鉄筋コンクリートの躯体に岡崎産の御影石を169個（１個平均４ｔ）組み合わせて造り、球体の真下には玄室が設けてあり献体者の名札が納められることになっている。

この「献体の塔」の周辺には公園的な施設の整備が行われ、塔とともに本市に寄附された。

献体の塔

平和公園会館

平和公園桜の園の北側に墓参者及び公園利用者の休憩と公園の管理機能を備えた施設として、平成元年５月にオープンした。建築面積は692.1m^{2}である。

平和公園一万歩コース

平成７年に「平和公園再整備計画基本構想」が策定され、新たな周遊自然歩道の整備が計画された。外周樹林地の小径、既設の歩道や園路をつなぐ工事を行い、平成15年３月に平和公園一万歩コースがオープンした。一周は約6.5㎞、標高差は約40ｍ、所要時間はゆっくり歩いて約２時間程度である。主たるコースは樹林地で、季節の変化や市街地の眺めを満喫しながら、誰でも気軽に散策を楽しむことができる。昭和42年に整備された「東山公園一万歩コース」とともに、健康増進やリフレッシュのため多くの散策者が利用している。

里山の家

平和公園南部くらしの森に散策者のための休憩所であり、なごや東山の森づくりの活動拠点として休憩所、事務所、便所、倉庫、合わせて建築面積130m^{2}の施設が平成22年８月に整備され、同年９月「里山の家」としてオープンした。

建物内にはなごや東山の森づくりの会による東山の森に生息している動物昆虫の紹介パネルがあり、季節毎の植物展示等が行われている。

里山の家